

伊能忠敬研究

史料と伊能図

研  
究

二〇一一年第六二号



伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL  
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS  
No.62 2011

表紙図解説 米国議会図書館所蔵

伊能大図第137号 神戸（部分）

山陽道の攝津国武庫郡から播磨国明石郡、および淡路島の北部を描く第137号の、神戸・兵庫付近である。137号は、この図のほかに国立歴史民俗博物館、海上保安庁海洋情報部にも模写本がある。議会図書館所蔵大図のなかでは数少ない彩色図で、本誌カラーレーベルの最初を飾るにふさわしい。測線、記号の朱、山の緑、海川の藍、砂浜の黄などが鮮やかである。本来は墨の小さい屋根形の連なりで示される村の家並みが本図では黄色の枠付長方形となつてするのが特色、東隣りの第35号大坂も同じ様式である。

神戸、兵庫、西須磨と天測の☆印が続くが、兵庫、西須磨は文化二年（一八〇五）の第五次、神戸は文化六年の第七次測量の際の測量である。第五次では海岸を、第七次で街道を測っている。

第五次（畿内・中国）では二つの小班がそれぞれ摩耶山に登り、山頂から山々を測ったという。山頂へのルートの測量はしていないので測線はなく、大図をみただけではこの山に登ったことは気づかない。日記を読むことで知ることのできる事実である。後年（天保年間）、津藩の学者齊藤拙堂は、山道は大変な急坂だが、山上の天上寺の境内からは大坂湾とそれを囲む山々が一望でき、紀州と阿波の間から極まりない海（太平洋）に続いているといつた紀行文を残している。忠敬たちは生田神宮、布引滝にも立ち寄ったとあり、この滝には測線が延びている。だが、これはこの時ではなく第七次の測線だ。摩耶山のあと、楠公ノ碑の前でその位置を図に記すため山々を測ったとするが、この模写本には碑の記載はない。日記から神戸一兵庫、なかでも兵庫の殷賑ぶりが伝わる。また、一帯は名所、旧跡が目白押しで日記も賑やかである。

鈴木純子（題字は伊能忠敬の筆跡）

目次

62号

話題

特報 伊能図とともに幕府へ上呈した『輿地実録』正本を確認 鈴木 純子 1

伊能測量現地史料紹介① 『輿地実録』正本を確認 鈴木 純子 1

尾鷲大庄屋土井家文書（一） 伊藤 栄子・渡辺 一郎 5

—よく揃つた測量関係の村方文書として— 伊藤 栄子・渡辺 一郎 5

コラム 忠敬さんの印鑑調べ 渡辺 一郎 11

伊能測量現地史料紹介② 第四次隊、中能登を行く（一） 加賀藩十村真領四郎大夫「覚書」より 河崎 倫代 12

伊能測量現地史料紹介③ 唐津、伊万里辺の忠敬の先触れと村方記録 渡辺 一郎 18

研究ノート 忠敬と大雄山最乗寺・道了講 大沼 晃 25

忠敬の見た風景（その六） 石谷 春香 29

● 忠敬と大雄山最乗寺・道了講 大沼 晃 25  
● 研究レポート『伊能忠敬』（十二）  
忠敬の見た風景（その六） 石谷 春香 29

各地のニュース・お知らせ

理事会報告・伊能忠敬史跡紹介・会員便り・測量日記DVD発売ほか

表紙図解説 鈴木純子

編集部 33

伊能図とともに幕府に上呈した

## 『輿地実測録』正本を確認

鈴木純子

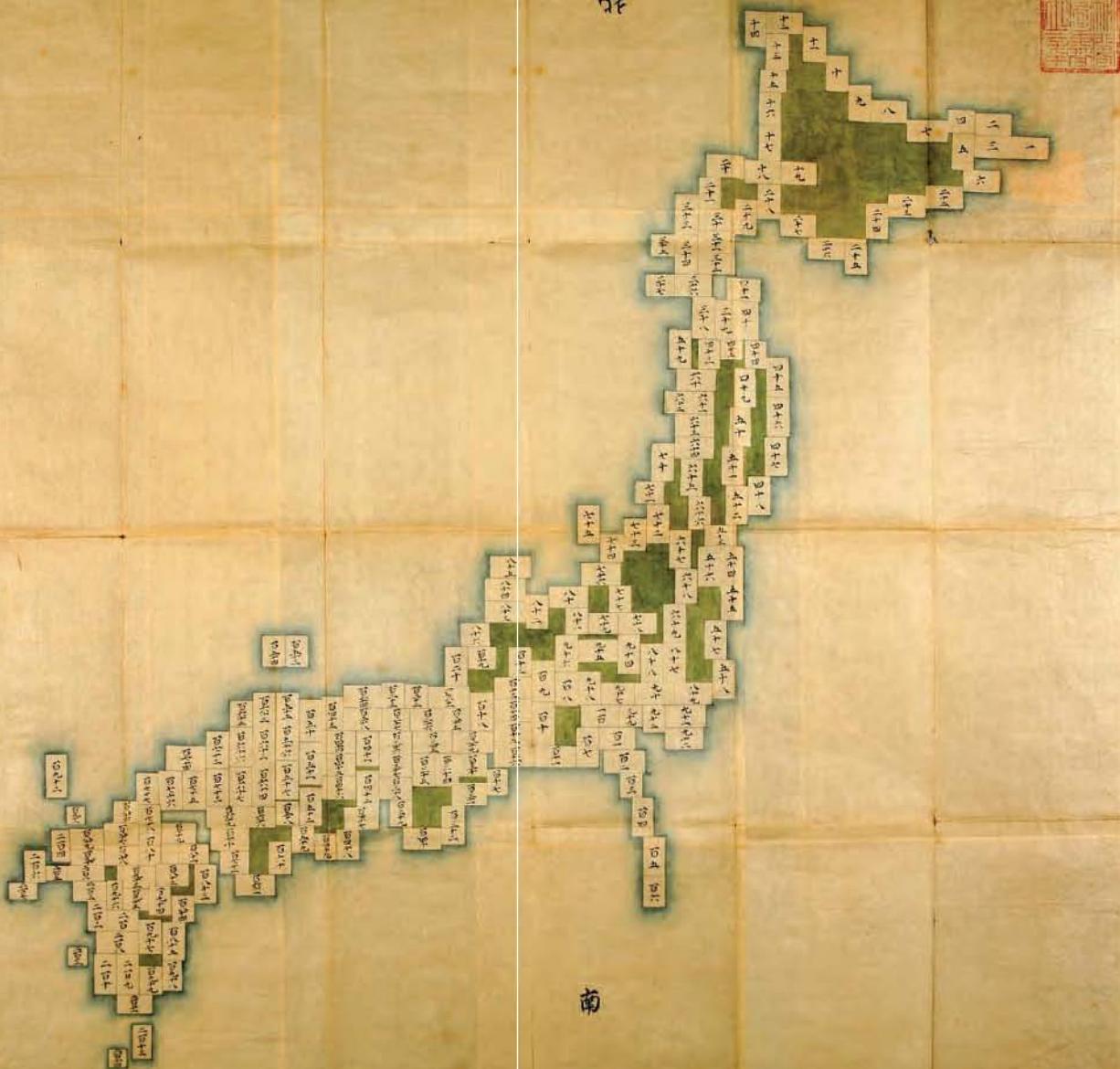
### 一はじめ

国立公文書館には『輿地実測録』の手書き三セットが収蔵されることが知られている。この三セットのそれぞれについて、昨二〇一〇年六月に、渡辺一郎名誉代表と筆者で、比較調査をおこなった。その概要是『伊能忠敬の地図をよむ 増補改訂版』（河出書房新社による）に記したが、詳細を本誌で報告する。

伊能忠敬の全国測量の成果の総まとめとして、文政四年（一八二二）に上呈された「最終上呈伊能図」の正本は、明治六年（一八七三）の皇居火災で焼失してしまい、今は見ることができない。このことは広く知られているが、地図と合わせて上呈された『輿地実測録』の正本、十四冊一舗は、現在も国立公文書館に保存されている。皇居火災の時、最終上呈図は地誌・地図編纂用の資料として、当時皇居内にあった太政官正院が借り出しており、そこで火災にあつたのだが、その時正院が借り出していたのは地図のみで、借り出されることなくそのまま紅葉山書庫に収蔵されていた実測録は無事生き残ったということである。これについては、江戸幕府の命により編さんされた諸資料の解説目録である『江戸幕府編纂物』（福井一九八三）の「大日本沿海輿地全図」の項に記載されている。辛うじて現代に伝わる上呈本の片り

んとして貴重な資料であるが、これまでこの記事で知るのみで実物に接する機会がなかつたため、ぜひ実物にあたつてみたいと考えた次第である。





地図接成便覧（『伊能忠敬の地図を読む』河出書房新社より）

二 『奥地実測録』とは

『輿地実測録』とは伊能図、すなわち『大日本沿海輿地全図』とともに上呈された測量のデータ集である。首巻および、一～十三巻の計十四巻で、首巻には高橋景保による大日本沿海輿地全図序、伊能忠敬による序および凡例（執筆は久保木清淵によるとされる・いずれも文政四年夏六月の年記をもつ）、さらに景保又誌として測量隊員名と測量事業の顕彰、以下、全巻の総目を収録する。一～十三巻は街道、沿海、嶋嶼、湖沼、蝦夷の順に、それぞれ地方別に順次、各測量地点について隣接地点との距離、緯度を記載する。加えて、大図二一四図各図の接合関係を示す一覧図である「地図接成便覽」（折りたたみ一鋪）が付属資料としてそえられていた。

三 国立公文書館所蔵の『奥地実測録』

福井（前掲書）の記述を参考にしつつ、実見した結果はつぎのようなものであった。

最初に述べたとおり、国立公文書館には上呈本を含む『輿地実測録』写本が三セット所蔵されている。そのうち、函架番号177-920（以後Aとする）の一セットが上呈本であることは、すでに福井によって報告されている。ほかの一セットの函架番号はそれぞれ、177-919（全十四冊）（以後B）、177-922（全十四冊）（以後C）である。この二セットとも対比しながら、上呈本をあらためて検証した。

A・B・Cを比べると、一見したところでは、黄色、紗綾（さや）型押の紙表紙に「輿地実測録」という題簽、袋とじ、大きさなどの装丁、また、記載内容、黒界九行の罫紙（木版）に楷書の手書きという点は三種とも同じである。

ただし、テキスト部分がほぼ同じであるのに対し、Aにかぎって十四冊の「実測録」のほかに、「地図接成便覧」一鋪がそえられている点が特筆される。実測録の冊子と同じ大きさに折りたたみ、同じ表紙がつけられて、一緒に保管されている（請求記号同一）。また、Aの帙題簽には「楓山本」と付記されている。BとCは冊子のみで接成便覧はついていない。実測録に付録として接成便覧がそえられていたことは、紅葉山文庫の『元治増補御書籍目録』により確認できる（福井前掲書）が、現存が知られているのはこの一点のみである。

三種とも精写ではあるが、Aは筆跡もよく罫紙の黒界の刷りも鮮明である。福井氏は「高雅晴朗な美本」としている。B、Cにはわざかながら誤写あるいは誤写の訂正がみられる。すなわち、Cには朱筆ないし付箋で誤写が指摘されている箇所があり、その部分がBでは誤とされている文字、Aでは正とされている文字になつているという関係がみられ、ミスがないとみられるAは上呈本というふざわしい（右下表参照）。

また、川の三本目の下端にみられる内側へのハネ、図と圖など文字

の用例は、A・Cに共通部分が顕著、Bとの間には違いがみられる。A・Cでは、Bではない異体字の使用も見つかっている、などの違いがある。

#### 四 藏書印と資料の由来

Aには「秘閣図書之章」という朱の角印がある。この印記はAが紅葉山文庫本、つまり上呈本であることを示すものである。これは維新後、太政官正院歴史課が

旧幕府紅葉山文庫本を管理していた明治五年以降に作られた数種の藏書印のひとつで、紅葉山文庫本には全てこの印が押印された。幕府時代の紅葉山文庫では藏書印が用いられていなかつたので、この秘閣印（大の新旧二種・小一種の三種ある）は、紅葉山文庫本であることを確認する有力な手がかりとされている（内閣文庫一九八二）。「ただし、稀にその他の資料にも押印例があるといふ」。『大日本沿海輿地全図』と『輿地実測録』の紅葉山文庫への入庫は『御書物方日記』文政四年（一八二二）十一月十三日の条に記録されている。この資料がひき続き幕末まで収蔵されていたことは、『元治増補御書籍目録』中の「御家部」に、「実測輿地全図 大図 三〇軸 伊能忠敬等撰／同 中図 二軸 同 小図 一軸 同／輿地実測録 一三巻首一巻・附接成便覧一張 一四冊 同上」（→は改行）と記載されていることから確認できる。今回は同じく国立公文書館に収蔵されているこの日記も確認した。地理類として、国絵図などと共に記載されている。内容は福井の記録どおりだが、目録では「中図二軸」という部分が重複記載されている。元治の御書目増補は元治二年（慶

A	B	C
畫	盡	盡 恐 誤 (付箋)
麥	麥	麥 → 麥 (朱で訂正)

応元年 一八六五に実施された。幕末の記録に残る上呈本がAであることは、押印された印記からも確かめられる。

残る二セットのうち、Bには「昌平坂学問所」

「大学藏書」（朱）、

Cには「地誌備用圖籍之記」「図書

局文庫」（朱）の印記がある。ほか

に「日本政府圖書」印が三セットと共に通して押印されている。昌平坂学問所の印記はその本も献上本であることを示しているという（福井 前掲書）。

学問所印のあるBは、同じ印記を持つ東京国立博物館小図三舎とともに、文政五年（一八二二）五月に高橋景保が献納したもの（佐々木二〇〇三）、地誌備用圖籍印は内務省地理局の地誌資料に用いられた印記である。地理局へは伊能家からの副本献納の際に「輿地実測録」・「接成便覽」も献納されたことが明治五年一月の測量司による伊能源六宛の借用書（世田谷伊能家資料・現伊能忠敬記念館蔵 註1）にも残つてゐるが、便覽を欠く本資料が副本由來のものかどうかは今のところ確認できていない。

以上みてきたとおり、国立公文書館所蔵の三点のうちAが上呈本であることは相互の比較を通じて確かである。ただ、上呈本の姿を伝え



紅葉山文庫旧蔵本であることを示す「祕閣圖書之章」印

の無双帙二帙に収められている。

なお、明治三年（一八七〇）、大

學南校刊の「大日本沿海實測錄」は、當時大學別當兼侍讀であった元福井藩主松平慶永（春嶽）所蔵本を底本としており、上呈本とは本文に異同があるという（福井 前掲書）。

註1 伊能家副本は明治五年に工部省測量司に貸し出され、同年五月の皇居火災後に、献納への切り替えがおこなわれた。

参考文献  
福井 保 一九八三 『江戸幕府編纂物』  
〔解説編〕 雄松堂出版

内閣文庫 一九八一 『内閣文庫蔵書印

譜 増補改訂版 国立公文書館  
佐々木利和 二〇〇三 『浅草文獻納書目』（解説・別に図版あり）『伊能忠敬と日本図 江戸開府400年記念特別展』（図録） 東京国立博物館  
(すずき じゅんじ)

る「要記」（大谷引用・では、実測録について「輿地実測録十四巻内一巻序目凡例 七百一十七枚 美濃紙黒界本 標紙紅蒲色サヤカタ打 出 白練糸小口以浅黄裏之函入標題如本題」としており、現存資料の表紙の色は同時代の記録と一致せず、前記の「増補書目」では確認できる接成便覽についても記されていない。

函も現在は残つておらず、上呈本は首巻（序目凡例）・第一～六巻と、第七～十三巻・地図接成便覽が後補

## 尾鷲大庄屋土井家文書(一)

—よく揃った測量関係の村方文書として—

伊藤 栄子  
渡辺 一郎

本文書は、三重県尾鷲町の大庄屋土井徳蔵が自分用に作成した、第五次測量途中の通達類の写しである。通達は刻付けの廻状で廻され、村々は必要に応じて内容を書き写して次の村（または宿場）に送つた。

土井家の控えは、幕府事業となつてから、伊能測量に關し村方が受け取つた通達類一式が整つてゐるので、個別内容を報告したい。各地の旧家には、同種の少しづつ違う古文書が沢山残されている筈である。

これらを対比することにより、伊能測量の現場風景の細部が浮き上ることが期待している。収集・報告をお待ちしたい。なお、本稿の解説は伊藤栄子が担当した。

文化二年丑四月

公儀御役人衆上下拾四人、此度測量為御用諸国巡道通行被成候ニ付、右取扱控

土井徳蔵

御証文写

三通

行し、道中無料で旅行用人馬の提供を受けられる証書である。利用できる人馬の数量が記載されている。発行者の采女は、老中の大垣城主・戸田采女正である。

御証文は大切なもので、旅行中は御証文箱に收められて、身近に持ち運ばれ、宿では床の間の三方の上に置かれた。

出発に先立つて御証文を受け取ると、忠敬は写しを作り、旅行予定にしたがつて先触れを認めて、一緒に伝馬町の伝馬役に伝達を依頼する。伝馬役は自身の添え触れを書き、宿場に宿継ぎで伝達を指示した。封印して持ちまわつた。村々は写しの写しを見て控えをとつた。

第一番目の宿場では通例、御証文写の更に写をとつて、写し本文は一人足六人

覺  
一人足六人  
一馬壱疋

一長持壱棹

右は測量為御用測器類從江戸、東海道中國筋、四国九州壹岐対馬、隱岐淡路海辺廻り浦帰路は、中山道甲州街道往返共、伊能勘解由断次第御用中幾度も可持送者也

丑二月 采女

右村宿中

右は測量機器運搬用の人馬利用を許可する御証文である。コースは漠としているが、あとで勘定奉行の先触れでは具体的に経路がしめされている。宛先は遙か左下の右村宿中。村や宿の年寄は老中から遙か目下な為である。

御証文とは、公用旅行者に対し、老中、勘定奉行、所司代などが発

人足壱人馬五疋、從江戸東海道中國筋、四国九州壹岐対馬、隱岐淡

路海辺廻浦、帰路は中山道甲州街道往返共、測量御用二付天文方高

橋作左衛門手附伊能勘解由、作左衛門弟高橋善助、天文方下役市野

金助、坂部貞兵衛龍越付、壱人式疋勘ヶ由、壱疋充、善助、金助、

貞兵衛へ相渡之者也

文化二丑二月采女

右村宿中

個人の旅行用品運搬用人馬の利用を認める証文である。忠敬は馬二

匹人足一人、他の三人は馬一匹あてである。隊員の内弟子には手当て

は付いたが馬は無かった。忠敬の二匹目は内弟子共用分か。

伊能勘ヶ由儀為測量御用、東海道より中國筋四国九州壹岐対馬、隱  
岐淡路迄海辺浦々罷通り、帰路は中山道甲州街道往返共、於途中も  
測量可致間、其先キ々ニ而差支無之様致し、尤地方通行難成所ハ其  
所より船を出し、案内致し無指支様可致者也

文化二丑二月采女

宿々

村々年寄共

割印 丑二月廿四日

退出

兵庫

和泉印

右者此度東海道其外西国並中國筋海辺浦々測量為御用被差遣二付、

書面之通無貸之人馬被下候間、宿々村々おみて其旨相心得、往返共  
無滞可差出者也

一長持壱棹持人

一馬壱疋  
一人足六人

伊能勘解由  
高橋善助 下役式人

急

上包紙二 御触書

追而此触書早々相廻し承知之旨、別紙請書相添留りより左近役所へ

可相返候

一人足壱人馬式疋

一馬壱疋宛  
右之外測量持運

伊能隊が行くからよろしく。陸路通行が難しかつたら船を出して案  
内するよう、と命じている。この通達を拡大解釈すると何でもして  
あげるよう、となるが、事実そのようにおこなわれた場所が多い。

村・宿場の一同行に宛てた前二つの通達と宛先がかわり、年寄共とし  
て、村役人に宛てられている。村の幹部によきに計らえという意味で  
あるうか。

退出 煩  
美濃

左近 印

飛驒

主膳 印

この先触れは勘定奉行から沿道の宿々、村々に宛てたものである。  
前三通の御証文は伊能忠敬が発した先触れに写として添付されたと思  
われるが、勘定奉行先触れは、後の記録から写しではなく、本紙が同  
時に直接継ぎ送られたと考えられる。

長持ちに持人の文言が追加されている。発行日の二四日は伊能隊出

発の前日である。以下に当初計画された具体的な経路がしめされる。

江戸を出発した測量隊は、東海道から紀伊半島を巡り、大坂から京都に出て、山陰を下関まで進む。山陽道沿岸を舞子まで戻つて四国の大波に渡り、土佐、愛媛を測つて豊後から大隈、薩摩に至る。

薩摩から天草を含め九州を北上して肥後、肥前、壱岐、対馬、北九州を測つて伊予、讃岐を経て大坂に戻る。大坂から草津を経て東海道を名古屋に戻り、中山道を新宿に帰る。という大計画だった。

三年くらいかけて、西日本を一挙に測ろうという予定だったが、実際には、そうはいかず、五回に分割されて、約十一年を要することとなつた。この先触れを受け取つた方も破天荒な計画にビックリしたに違いない。

御用	測量方	先触	御証文	一 人足七人	同	一 馬六足	一 長持棹持人足
御用	測量方	先触	御証文	一 人足七人	同	一 馬六足	一 長持棹持人足
御用	測量方	先触	御証文	一 人足七人	同	一 馬六足	一 長持棹持人足
御用	測量方	先触	御証文	一 人足七人	同	一 馬六足	一 長持棹持人足
御用	測量方	先触	御証文	一 人足七人	同	一 馬六足	一 長持棹持人足

勢州	志州	紀州	泉州	攝州	大坂	右国々	宿々村々	問屋	年寄	中
東海道筋	品川宿より桑名迄	江戸伝馬町	市野金助	坂部貞兵衛	印	高橋善助	印	伊能勘解由	印	二月廿四日
海辺	右国々	宿々村々	印	印	印	印	印	印	印	可有之候其外川越渡船場ハ、前宿申合、且止宿等之儀差支無之様致し、尤右通行筋山川共致測量候間、村送りニ案内可有之候
問屋	年寄	中	印	印	印	印	印	印	印	一泊宿之儀、雨天其外逗留之儀も有之候間、途中より追々可達候尤御測器据込候間、明キ地十坪計之地所用意可有之候 尤泊宿二而夜分致測量候間、可成丈ヶ上下不残同宿之積り用意可有之、尤海辺村方建家間狭ニ而、何様ニも同宿難成儀も候ハ、近辺ヘ別宿用意可有之候 且其所之勝手ニより寺院ニ止宿候而も不苦候
伊能勘解由	印	印	印	印	印	印	印	印	印	支度之儀ハ御定之木錢米代相払候間、其所有合之品ニテ一汁一菜之外、決而為無用候
伊能勘解由	印	印	印	印	印	印	印	印	印	則御証文写三通差遣候 此先触早々致順達、我等大坂着之節宿所へ可相達候 勿論大坂より先キ之儀ハ 大坂表へ着之上、同所より先触可指出候ニ候以上

伊能忠敬自身の先触れである。老中のお証文の写しを添付し、具体的な要請を記している。変更もありうる。夜間天体観測用の場所の用意を願いたい。なるべく宿は一軒にして欲しい。寺院でも構わない。

宿泊料はお定めの木銭、米代を支払う。一汁一菜のほか馳走をしないように、と述べる。とりあえず大坂まで流された。

受けた村々は、刻付けの廻状なので、昼夜を問わず、控えを取つて次の村に伝達しなければならない。書類は大工道具箱のような頑丈な木箱に収納され、複数の人足がかついで走つた。一人が倒れたら代わりがかつぐ。伊能隊は部隊であり、命令は軍令と考えれば納得できる。この先触れは予告で、実際には、宿泊日程を確定した泊付けの先触れが、さらに一ヶ月分くらいごとに流された。

添触  
覚

一御勘定奉行様御連印  
御触書壹通

右ハ此度測量為御用、御役人中江戸御出立二付、被成御渡候間則差  
越申候 尤御触書之内削三ヶ所、其外墨付よこれ無之候間、宿村大  
切拝見之上早々繼送り可被申候以上

丑二月廿四日

御伝馬役

高野新右衛門 印  
品川宿より御用先々宿村

印

問屋

名主 中

忠敬先触れと、全ルートを順達したと思われる勘定奉行先触れの添え状である。最初の休泊予定も含まれていた。

急御用  
廻状

川崎宿問屋

神奈川宿より先々

以廻状得御意候 然ハ此度御通行被成候測量御用伊能勘解由様 御  
証文人馬之外人足四人、測量御道具持人足入用二御座候然ル処、今  
日品川宿よりは間之村繼二て参り候得共、夫ニ而ハ所々ニ而人足入

問屋 中  
名主

江戸南伝馬町  
高野新右衛門

添触  
覚

一御勘定奉行様御連印  
御触書壹通

右ハ此度測量為御用、御役人中江戸御出立二付、被成御渡候間則差  
越申候 尤御触書之内削三ヶ所、其外墨付よこれ無之候間、宿村大  
切拝見之上早々繼送り可被申候以上

丑二月廿四日

御伝馬役

高野新右衛門 印  
品川宿より御用先々宿村

印

問屋

名主 中

忠敬先触れと、全ルートを順達したと思われる勘定奉行先触れの添え状である。最初の休泊予定も含まれていた。

急御用  
廻状

川崎宿問屋

神奈川宿より先々

以廻状得御意候 然ハ此度御通行被成候測量御用伊能勘解由様 御  
証文人馬之外人足四人、測量御道具持人足入用二御座候然ル処、今  
日品川宿よりは間之村繼二て参り候得共、夫ニ而ハ所々ニ而人足入

替り御用弁し兼候二付、右人足當宿より宿繼にて差出くれ候様被仰  
聞候 尤此段当宿より以廻状、先々江申通候様ニと御座候間此段申  
進候左様御心得可被成候、以上

丑二月廿五日

川崎宿問屋

藤右衛門 印

神奈川宿より  
先々御問屋中様

川崎宿からの急廻状である。御証文の外に測量道具の持ち人足四人が必要になつた。品川宿では四人を途中の村継ぎで出してくれたが、それでは作業が不便なので、川崎からは宿場人足を使う宿継ぎにして欲しいといわれました。そして先々にも伝えて欲しいとのことなので、お知らせします。という廻状である。

問題は二つある。まず出発草々、御証文の枠を超えた人足の利用である。老中証文の三通目の趣旨からみれば、仕方がない範囲かも知れない。しかし、これを先々の宿に伝えよ、というのはどうだろうか。地元の善意で協力ならいいが、最初から許可された枠を無視して指示を出すのはいかがなものかと感じる。

尾鷲では下役独断の指示が大問題となり、市野金助が離隊するのだが、第五次測量では最初からその萌芽があつたようと思われる記録である。忠敬が知らないところで、下役の指示で扱われたのではなかろうか。宿場側では、これだけの体制で出発した測量隊の命令には従うしかなかつたろう。

一、御勘定奉行様御連印御触書、測量御用御役人中様御触書 右之通丑二月廿八日申中刻、江尻宿より奉受取候所、安部川満水通路無之候二付、御留置今廿九日辰中刻 安部川口明キ候ニ付、即刻丸

子へ御継送り申候 以上

丑二月廿九日

府中宿問屋

太兵衛 印

大井川満水夜越難成断書 式通  
天竜川同断夜越難成断書 式通  
右天龍川端三月朔日御泊リニ成ル

メ五通

大井川、天竜川が川止めで、先触れ、廻状の伝達が遅れた理由書である。刻付けなので、通送が遅れたときは理由書が必要だつたようである。

汚れの断り書きもある。届いたときは汚れていたよ、という言い訳か。このような文言も写しがとられたことに驚く。

墨付 よこれ断書 壱通  
同 壱通  
見付宿 問屋 印  
志州堅神村 庄屋深江 印

文化二乙丑年

見付宿 問屋 印

東海道中國四国九州迄、宿々村々海辺浦々御請印形帳  
二月廿四日

東海道 品川宿

一人足壹人 馬式足

一人馬 壱足宛

高橋善助様 御下役式人  
伊能勘解由様

一人足六人 馬壹足

一御長持壱棹持人

右は此度東海道其外西国並中國筋、海辺浦々測量為御用御越被成候  
二付、書面之無賃人馬被為下置候間、宿々村々二おみて其旨相心得、  
往返共無滞御繼立可仕旨、御触書拝見奉畏候依之御請印形奉差上候

以上

文化二年

丑二月二十五日

問屋  
年寄

庄屋  
中

段々請印致有之候

ほかの測量記録を読むと、判取り帳は最初の宿場で作られた。お触  
れの内容はこのように膨大なものだった。

覚

壱包

- 一 御証文写三通
- 但し上二墨付汚有之候
- 一 測量方御触 壱通
- 一 御勘定奉行様御触書 壱通
- 但し播州之州之字二墨付有之候
- 一 御伝馬役添書 式通
- 一 川崎問屋廻状 壱通
- 一 川留書付 五通
- 一 墨付断書 式通
- 一 八品 白木箱入 外二村々送書 壱包

右之通大曾根浦より請取候二付持送り候 改御受取刻付ヲ以  
順達可被成候 以上

丑四月十四日 行野浦、矢ノ浜村兼帶庄屋佐蔵 印

九木浦庄屋

仁右衛門殿

行野浦から九木浦への送り状である。お証文箱は大きな木箱だった  
らしいが、各宿の送り状は皆中に入っていた。刻付きは至急扱いで、  
昼夜を問わず、継ぎ送る必要があった。夜なら人足当番を複数人叩き  
おこして、担いで走らせた。担ぎ人が倒れても、他の者が代わって通  
送した。

急御用廻状  
吉田船町

廻状

吉田船町

此間先触順達仕候天文方伊能勘解由様御通行之由、海辺付村々、一  
昨年測量相済候二付、此度は東海道筋御通行被遊候段、白須賀宿よ  
り申参候二付、為御知申上度海辺二無御座候間、何角御心遣不及申  
候

一 御先触之儀白須賀宿より海辺付へ繼立候段、大ニ不調法ニ相成候  
先々御指支ニ相成候得は、猶々不調法ニ相成候間、此廻状早々御  
順達御先触ニ追付候ハ、右之段御承知之上御先触御写置並ニ拝見  
迄も不及候間、早々熱田宿迄御繼立可被成候 延引ニ相成御指支ニ  
相成候而ハ、浦繼村々迄も少々不調法ニ相成可申哉と奉存候 早  
々御順達可被下候 以上

丑三月廿八日 午上刻

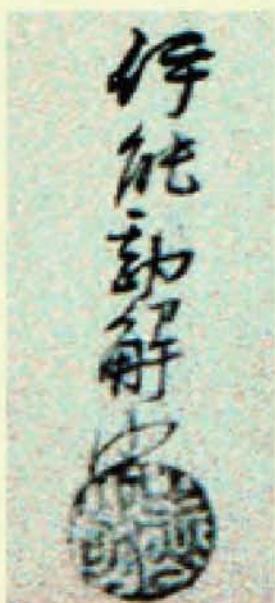
船町庄屋

下地村より先々海辺付熱田宿迄

九郎左衛門印



世田谷伊能家旧蔵 現在伊能忠敬記念館藏の遺書と思われる書類である。黒印が押してある。第8次測量に先だって記された。



上は上記印鑑の拡大図である。忠敬先生の署名はなかなか達筆である。  
右の津軽家旧蔵の沿海小図は傷みが激しいが、針穴本で、押印がある伊能図はこれだけと思われる。(渡辺)

## 忠敬さんの印鑑調べ

東北支部長の松宮さんから、あるところで忠敬の書が発見された。印鑑があるので、検証のため、忠敬の印鑑を探して欲しいと言われたが、これがなかなか難しいのである。

だいぶ以前に紹介したことがある「大切な書き物」と表題がある第八次測量出発前に書かれた遺書(?)とおぼしき書きもの(上左写真)と、津軽家旧蔵の沿海小図(右写真)に印があることを承知していたので、探してみた。カラーバンの特徴をいかし、今後のために紹介しておく。



国立国文学研究資料館蔵(津軽家旧蔵)の沿海小図凡例に見られる押印。この凡例は、文化元年小図の凡例の中では、最も達筆ではないかと考えている。国立国文学研究資料館蔵にはこのほか、沿海中図3枚揃いも所蔵するが、傷みが激しいので、実物は見学不可。ダイレクトプリントの写真しか見られない。

問屋  
年寄 中  
庄屋

尾鷲浦が写す必要のない廻状である。第四次測量で海岸線を熱田まで測つたので、今度は東海道を計るよといつてはいるのに、白須賀村が海岸の村を継ぎ送つたので、間違いだからと修正のための廻状だった。

(いとうえいこ・わたなべいちろう)

## 第四次測量隊、中能登を行く（一）

— 加賀藩十村<sup>とむら</sup> 真館四郎大夫「覚書」より —

河崎 倫代

### はじめに

第四次測量隊の加賀藩測量の様子を記した地元史料としては、石川県立歴史博物館『新田家文書』の「為公儀測量御用天文方伊能勘解由殿海辺巡回付答之趣書上申帳」（以後、「新田書上帳」と）と石川県立図書館『真館家文書』の「為測量御用伊能勘解由殿巡路取扱之趣書上申帳」（以後、「真館書上帳」）が知られる。前者は河北郡、後者は鹿島郡の十村（他藩の大庄屋にあたり、数十カ村を管理する）が加賀藩に提出した報告書の控えであり、石川県のほぼ中央部にあたる中能登地域での測量の様子が詳述されている。忠敬の肉声が聞こえてくるような臨場感あふれる場面や、測量方法・測量器具に関する記述もあり、加賀藩測量を知る貴重な史料である。筆者はこれまでに、この二点を「加賀藩十村役の報告書に見る伊能忠敬の領内測量」（『加能史料研究 第六号』一九九四年）と「密着リポート」伊能忠敬測量隊（『金沢学院大学附属高等学校紀要 第十四号』一九九七年）で紹介した。

その後、石川県立図書館『田中文庫』に「為測量御用天文方高橋作左衛門殿弟子伊能勘解由殿浦方御巡回ニ付前後諸事覚書」（以後、「真館覚書」）があることを確認した。これは、実際に測量に随行した鹿島郡十村真館四郎大夫の手代（十村に仕えて種々の雑務にあたつた）の覚書であり、これを基に「真館書上帳」が作成された。第四高等学校の数学教授だった田中鉄吉（一八六一～一九四五）が写したもの

で、若干の誤写・誤読があるかもしれない。原本はおそらく『真館家文書』の中についたと思われるが、今は所在不明となつていて、比較考証はできなかつた。

加賀藩は現在の石川・富山両県を領地としていたが、本稿では石川県域のみを扱う。石川県では現在でも、北部を「能登」、南部を「加賀」と呼んでいる。近世にはさらに、能登の北部を「奥郡」（珠洲郡・鳳至郡）、南部を「口郡」（羽咋郡・鹿島郡）としていた。「真館書上帳」は口郡の報告書であり、現在のところ、奥郡での測量隊の様子を記した史料は発見されてない。

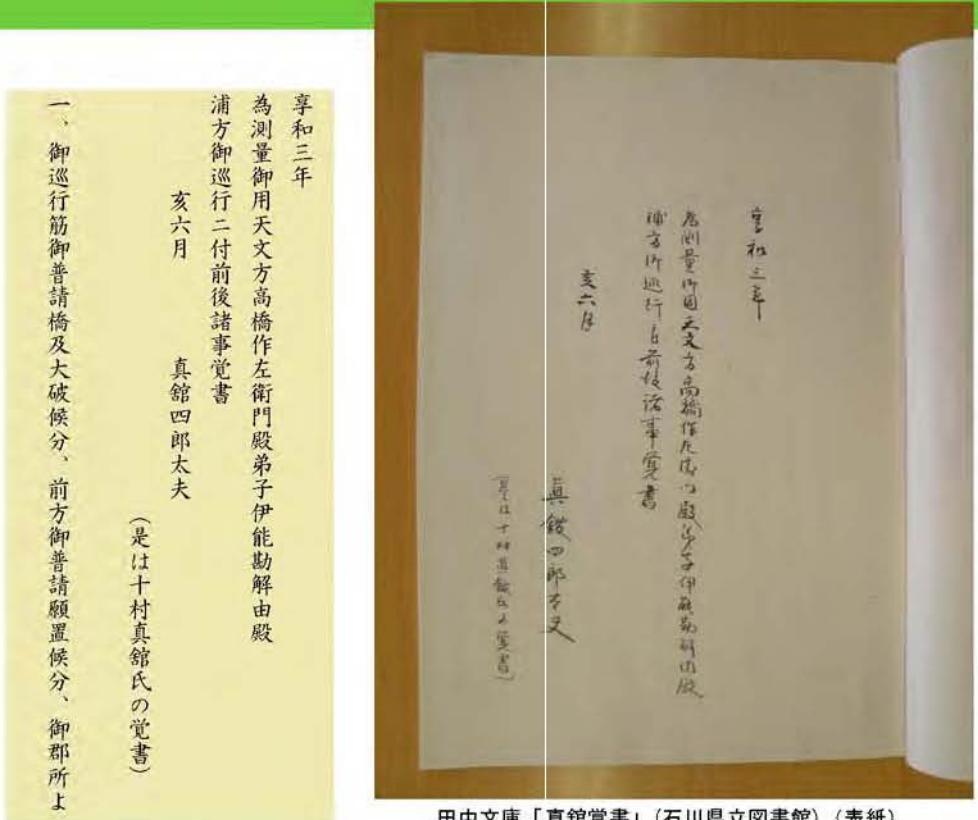
享和三（一八〇三）年二月に幕府から領内測量の予告を受けた加賀藩では、情報を収集し、測量隊への対応を決定して、領内へ通達した。その概要是、「郡境・村境には杭を打たせない」、「忠敬は百姓身分だから重き扱いには及ばない」、「隠密がましいので、村高・家数などは答えない」というものだつた。実際、測量隊の応対には藩士・十村クラスは出さず、十村の手代と村役人があたつた。

今回、田中文庫「真館覚書」を本誌で紹介するにあたつて、次の四回の連載を予定している。初出史料ではあるが、「真館書上帳」の底本である以上、前掲二誌の報告ときわめて類似した部分が多くなることをお断りしておきたい。

- 第一回 河北郡高松村から羽咋郡今浜村まで（本隊）
- 第二回 今浜村から鳳至郡黒島村まで（平山郡蔵隊）
- 第三回 今浜村から鳳至郡乙力崎村まで（伊能忠敬隊）
- 第四回 凤至郡甲村から鹿島郡大野木村まで（本隊）

一、田中文庫「真館覚書」解説文

一、河北郡高松村から羽咋郡今浜村まで



田中文庫「真館覚書」(石川県立図書館) (表紙)

御作事之再往被仰遣候國にて、修覆方御入用銀御書記、右銀高  
之通大夫為致出来候様、六月廿八日の御紙面を以て、駅々十村中  
に被仰渡、其段村々え申渡候事

一、六月廿七日夜大雨洪水にて、御通行筋武部村しきの橋、久乃木  
村石塚橋、町屋村領落合橋、皆々流落申二付、御巡行指支候間、  
早速御普請被仰付候様御達遣候處、御取扱の様子も替り候哉、右  
落申橋々之儀、如何様にも取計、廻道にても通行相済候様可仕、  
御普請□御聞届難被成旨、七月二日金沢表にて手代藤吉へ被仰出  
候

但、此儀、右之通御断御遣候得共、急に御通行之程も難計旨、  
加州方主付十村中より申来候ニ付、如何様にも取計急々懸候様、  
村々江七月朔日二申渡置候

一、勘解由殿七月朔日宮腰御治り所より、二日四ツ時頃金沢江御越、  
則、宿尾張町住吉屋太兵衛方

一、三日朝金沢御出立、宮腰江御帰測量被致、同日栗崎泊り

一、四日栗崎出立、荒屋昼にて、高松え昼九ツ時着之由、依之河北  
郡主付十村中より飛脚書状を以て、明日御泊り昼之儀御尋被成度  
候間、御役人之内御一人、早速御越被成候様被仰渡候段申来り  
候、尤、主付手代次郎助・次助兩人遣置候得共、右紙面相分り不  
申二付、若村役人の事にても可有之哉と、今浜村肝煎文右衛門指  
遣候得共、主付手代共にて相弁、文右衛門儀罷帰候

一、四日勘解由殿等高松村止宿二付、兩人手代共、宿主鳴屋市郎右  
衛門を以、能州郡方許之者手代に御座候、御用儀御座候ハ、被  
仰下候様為申達候所、是え御通り候様にとの事ニ付、次の間迄伺  
公仕候所、勘ヶ由殿より被申談候者、先達御触の通、能州筋今浜  
辺にて致手分、一手は内筋七尾江罷出、東海二添相廻り、一手は

一、御巡行筋御普請橋及大破候分、前方御普請願置候分、御郡所よ

享和三年  
六月

真館四郎太夫

(是は十村真館氏の覚書)

西海に添相廻り候間、其図を以、泊・休所等不指支様有之度、段々被申聞候ニ付、同五日、外・内・泊・昼所因置候趣申達候所、其通にて可然旨被申聞、内筋えは勘ヶ由殿上下五人、今浜村昼休、子浦村泊り、六日高畠村昼休、二宮村泊り、七日所口町泊、外筋えは弟子平山郡歳上下三人、今浜村昼、鹿浜村泊、六日柴垣村昼、大念寺新村泊の趣に相決し、内・外共先觸可指出旨、被申聞候ニ付、兩人手代共罷帰候

一、五日朝六ツ頃高松出立ニ付、主附手代藤吉・次郎助・和助・次助、井二道案内村役人二人同道、御郡境之罷出居申所、無程勘ヶ由殿等、長十間計の鉄くさりを為引被罷越候ニ付、手代共勘ヶ由殿え相向、是より能登国羽咋郡にて御座候段申達、道案内村役人も平伏仕居候所、夫え罷出候役人中は泊り所迄案内有之儀に候哉、直二案内有之村名等尋候品相分り不申候ては指支候段被申聞候ニ付、御用の品は私共え被仰聞候様仕度段、手代共より申達候所、浦伝家建相隔見へ不申村者、大抵家之下と存候所にて、何村浦と申達候様有之度旨被申聞候ニ付、承知仕段相答候處、左候ハ、案内有之候様にと被申聞、右くさり、高松村領より中沼村領え被引通候ニ付、手代共より申達候は、郡村境等丁間打立之儀に御座候哉、若左様之儀に候得者、上役之面々より申渡之趣有之、手代共了簡二難及段申達候所、勘ヶ由殿被申聞候者、全国郡村境等しらべ申にても無之、今般日本絵図方ニ付、諸国測量候由被申聞、村々領境等尋も無之、加州筋被仕來候趣ニ御座候

一、米出村領にて、国山井子浦村海士崎、且又高畠村五石ヶ峰・石動山被相尋、遠目鏡を被見請候

一、今浜村領中にてくさり被引留、其場所に驗竹を被當置、夫より今浜村昼夜權左衛門前迄くさり被引候

一、昼休後、權右衛門前よりくさり被引懸候ニ付、手代共より勘ヶ由殿え申達候は、所口町迄道筋測量被成候哉、内筋の儀は御巡見而已と相心得罷在候段申候處、能州の儀者今浜辺にて二手に相成、一手は陸地より七尾え罷越候段、從公辺御觸有之承知の通にて致測量候義、指支不申旨被申聞、道筋曲々には磁石を立、方角被見請候体御座候

## 二、田中文庫「真館覚書」口語訳

※逐語訳では分かりにくい箇所は、意訳を試みた。

(一)は筆者の補足である。

(表紙略)

一、測量隊の巡行筋にある御普請橋（郡經費で普請することが明記されている橋）のうち、今度の大霖で大破した橋と、前より普請を願い出ていた橋の普請を、郡役所から藩の作事所へ再度願い出るつもりで、修復に必要な入用銀の見積りを書き出し、その銀高の通りに堅牢に仕上げるようにと、六月二十八日の紙面をもつて、（郡役所から）駅々の十村たちに仰せ渡され、さらに村々へも申し渡した。

一、六月二十七日夜の大霖による洪水で、測量隊の通行筋にあたる武部村しげの（鳴野）橋、久乃木村石塚橋、町屋村落合橋が流れ落ちてしまった。測量隊の巡行に差し支えるので、早速、普請を仰せ付けられるよう御達を遣わしたところ、取り扱いの様子が変わったのか、流れ落ちた橋々は如何よりも取り計らい、廻り道で通行が済むようにして、新たな普請は御聞き届け成り難いという旨、七月二日、金沢表にて手代の藤吉に仰せ出された。

但し、この件は右の通りお断わりになつたけれども、「（測量隊が）急に通行したいという場合もあるかも知れず、予測しがたい」



現在の石塚川（中能登町久乃木地区）

と、加賀の方の担当十村から申し来たつたので、「如何ようにも取り計らい、急いで橋を懸けるように」と、七月一日、村々へ申し渡した。

一、勘解由殿（伊能忠敬の隠居名）は、七月一日、宮腰（金沢市）に宿泊し、二日四ツ時頃に金沢へお越しになつた。宿所は尾張町住吉屋

太兵衛方である。

一、三日朝、金沢を出立され宮腰へお帰りになり、そこから測量を開始して、その日は栗崎村（金沢市）に宿泊された。

一、四日、栗崎村を出立し、荒屋村（内灘町）で昼食をとり、高松村（かほく市）へ昼九ツ時に到着の由。河北郡の担当十村から来た飛脚の書状には「明日の宿泊地と昼食地を尋ねたいので、村役人一人、すぐにお越いいただきたいと仰せである」とあつた。担当手代の次郎助と次助の二人を遣してはいたが、右の紙面の内容がよく分からず、もしかして村役人の事かもしれないと思い、今浜村（玉達志水町）の肝煎文右衛門を遣わしたが、担当の手代たちで間に合つたので、文右衛門は帰つてきた。

一、四日、勘解由殿たちは高松村に宿泊するので、二人の手代が伺い、宿主の嶋屋市郎右衛門から「能州（能登国）郡方才許の者の手代にござります。御用がありましたら仰せ下さい」と申し上げたところ、「こちらへお通りなさい」と言われ、次の間まで伺つた。そこで勘解由殿より申されたことは、「先だっての御触の通り、能州筋の今浜村辺で手分けし、一手は内筋を七尾へ出て東海に添つて廻り、もう一手は西海に添つて廻るので、そのつもりで宿泊・休所など差し支えのないようにしてほしいと申し聞かされたので、五日、外筋・内筋での宿泊地・宿所の予定を申し上げたところ、「その通りでよろしい」といわれ、内筋へは勘解由殿等五人、今浜村で昼休み、子浦村に宿泊、六日高畠村で昼休み、二宮村に宿泊、七日所口町（七尾市）に宿泊。外筋へは弟子の平山郡藏等三人、今浜村で昼食、塵浜村に宿泊、六日柴垣村で昼食、大念寺新村に宿泊と決まり、内筋・外筋とも先触れを差し出すように申し聞かされて、一人の手代は帰つてきた。

能登半島手分測量の起点今浜宿  
(宝達志水町今浜地区)



測量隊が宿泊した高松宿  
(かほく市高松地区)



一、五日朝、六ツ頃高松出立二付、担当の手代藤吉・次郎助・和助・次助、道案内の村役人二人が同道して郡境へ出ていたところ、程なく勘解由殿等が長さ十間ばかりの鉄くさりを引かせてお越しになつた。手代どもが勘解由殿へ向かつて、「これより能登国羽咋郡でござります」と申し上げ、道案内の村役人も平伏していると、「それへ罷り出た村役人たちは、宿所までずっと案内するのですか。案内する先々の村名等、こちらが尋ねることが答えられなくては差し支えが出ます」と申し聞かされたので、「御用の件は私どもへ仰せ付け下さいますように」と手代どもより申し上げたところ、「浦伝いに測量していく家建が見えない村は、家建の下あたりで、ここは何村の浦と申し出でほしい」と申し聞かされたので、「承知致しました」と答えたところ、「それならば案内するように」と申され、先ほどどのくさりを高松村領より中沼村領へ引き通されたので、手代どもより「郡や村境等の丁間（距離）を測量なさるのでしょうか。もししそうでしたら、上役の面々より申し渡すことがあります」私たち手代どもでは判断しかねます」と申し上げたところ、勘解由殿からは「国境や郡・村境等を調べるのではなく、今回は日本絵図を作成するために諸国を測量しています」と仰せられ、村々の領境などのお尋ねもなく、加賀の浦筋でなさつたとおりのようであつた。

一、米出村領では、国山、子浦村（海士崎のある千浦村か）の海士崎、高畠村五石ヶ峰・石動山を尋ねられ、遠目鏡で見ていた。

一、今浜村領でくさりを引くのを留めて、その場所に駿竹を立て置かれ、それより今浜村の宿宿である権左衛門（権右衛門か）前までくさりを引かせた。

一、昼休み後、権右衛門前からくさりを引かせ始めたので、手代どもより勘解由殿殿へ「所口町（七尾市）までの道筋も測量なさるので

しようか。内筋の方は巡見だけと心得ておりましたが」と申し上げると、「能州では今浜辺で二手に分かれ、一手は陸路を七尾へ罷り越すと、幕府よりお触れがあり、ご承知の通りです。測量するのに差し支えないはずです」と申し聞かされ、道筋の曲り角には磁石を立てて方角を見ている様子だった。

### 三、中能登の「今」を行く

伊能忠敬測量隊の詳細な報告書、「真館書上帳」や「真館覚書」を今に残してくれた加賀藩十村真館家は、現在どうなっているのだろうか。三月六日（日）、新会員の相良君・江波君と三人で武部村を訪ねてみた。いわゆる平成の大合併で誕生した鹿島郡中能登町武部地区の通称七尾街道（県道二四四号線）武部会館バス停から少し入ると、立派な庭園を持つ旧家があった。しかしそこは十村真館家の分家だった。本家は隣接地にあつたが、今は所有者も変わり、草地となっている。白壁の土蔵だけが取り残されたように建っていた。この中に「真館書上帳」や「真館覚書」が保管されていたのだろうか。高校時代に暗唱した『方丈記』の冒頭部分が思い出された。

たましきの都のうちに、棟を並べ甍を争へる、高き卑しき人のすまひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。あるは去年焼けて今年作れり。あるは大家滅びて小家となる。

（かわさき みちよ）



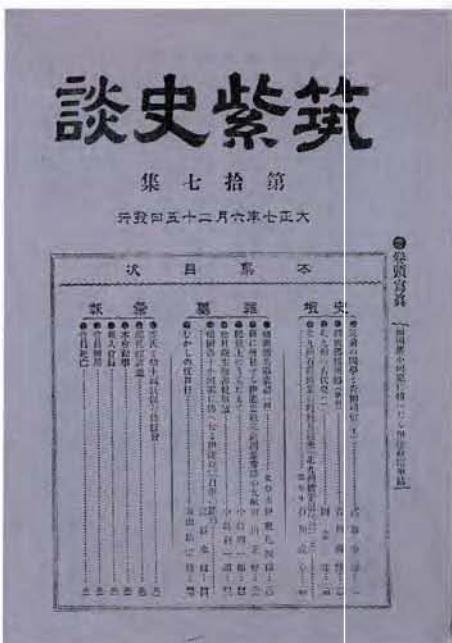
加賀藩十村真館家跡地と白壁の土蔵

## 唐津、伊万里辺の忠敬の先触れと村方記録

渡辺 一郎

はじめに

九州の井上会員から、筑紫史談拾七号（大正七年六月二十五日発行）の写をいただいたところ、そのなかに伊能忠敬が第八次測量で唐津から伊万里を測量する際に出した先触れを含む一件資料が掲載されている。行列の次第など、他の地域の資料には見当たらない記述があるもので報告する。



『筑紫史談』17号表紙

まず、忠敬先触の本文があつて、測量経路の概略を示して、御証文の人馬の提供を求め、宿舎と夜分の天測場の用意を依頼し、休泊代はお定め賃錢を払う。一汁一采之他は無用として、御証文写、書き上げ案文がしめされている。

御証文写の内容は形どおり控えられている。測器運搬には人足七人馬一匹、長持ち二棹の持ち人足。一行の旅行用には人足一人、馬六匹で、忠敬が人足一人馬二匹、天文方の坂部、永井、今泉、門谷には各馬一匹が与えられている。そして、そのあと測量にに差し支えないよう手配せよ、船が必要なら船を用意せよという次の文面が続く。

伊能勘解由儀為測量御用東海道藤澤大山通り富士街道早洲廻り遠州秋葉三洲鳳樂寺濃洲明知廻り尾張名護屋より美濃路中山道筋山城筋山城淀より山陽道赤間關夫より九州壹岐對馬五嶋其外鳴々廻浦歸山陰道丹波より京都廻り中山道大田より郡上通り飛驒信濃上野武藏秩父街道往返共於途中茂測量可致間其先々に而差支無之様致し尤地方通行難成所は其所より船を出し案内致無差間様可致者也

備前印

文化八月末十二月

宿々  
村々 年寄中

これは老中・牧野備前守（長岡藩主）の印が押され、忠敬が持つて歩いた御証文三通のなかの一通の写である。これによつて沿道から無料で旅行用人馬の提供や船用意などの便宜を受ける権利が発生する。老中の他に勘定奉行、京都所司代、大阪城代など幕府要職にのみ発行権があつた。宛先は遙か左下の年寄中（年寄一同）である。

次の文を読むと、文化九年八月二十四日酉の下刻というから大体午後七時頃、唐津継所についたことが分かる。刻付けの至急報だからすぐ写しを取つて、戌の上刻というから、八時台には左のような送り状を付けて徳末継所に送つたという。

継所の制度はよくわからない。御承知の方がおられたら教示をお願いしたい。

右御先觸書御證文寫御案紙八月二十四日酉下刻三奈木より參る 寫取左之状送り状共同夕戌上刻久喜宮へ直に為持遣す

覚

一、御證文寫 但壹からげ

一、書上帳

一、御先觸

メ箱に入

右之通り繼送り候間御改御受取被成即刻御順達可被成候以上

申 八月十九日

徳末 繼 所

徳末 伊萬里 本部 小田 牛津 嘉瀬 佐賀 境原 神崎 中原

轟木 田代 原田 二日市 宰府 甘木 三奈木 比良松 久喜宮  
江送り

右御觸状文化九年申八月廿八日巳ノ刻比良松於大庄屋元寫之者也

一、伊能勘解由様（御案内）

下大庭村庄屋彌右衛門 志波村庄屋才八

二段目の先払い、こちらは多分數十間先だらう。  
忠敬には案内人が二人ついた。

一、道中記方

入地村庄屋 十平 鼓村庄屋 勝助

書上げ担当かと思ったが、途中経過の記録係だつた。珍しい。

村役人出方役割

測量当日の役割表である。

一、大御先拂

長淵村組頭 傳 次  
幕持夫貳人 同村より出す

隊列の遙か前方を進み、どいたどいたと野次馬を払い除ける仕事で郡方や浦方の同心が務めることが多くたが、村役人が務めることもあつた。そのときは村役人は脇差を帶び、羽織、股引支度が普通だつた。幕持ちは清掃人足。馬糞、牛糞が多かつたのだろう。先払いを大先払い、先払いと二段重ねるのは珍しい。

一、梵天持才判 入地組頭 次左衛門

持夫拾五人 同村より出す

同拾五人 宮野村より出す

梵天持ち夫はこんなものだろう。才判は指揮者。裁判の語源といふ。

一、御先拂 上寺村組頭 良左衛門

幕持夫貳人 同村より出す

二段目の先払い、こちらは多分數十間先だらう。

江送り

この文書は八月廿四日に三奈木から繼ぎ送つてきた文書を、比良松

の大庄屋が八月廿八巳の刻というから昼前の十時ころ写しとつたもの

という。月日が一致しないから、繼ぎ送りの現場ではなく、後日記録

のために写したものだろう。

一、繪圖面方 中村庄屋 平右衛門 黒川村庄屋 藤右衛門

測量隊に提出する村絵図の担当だらう。

一、數取庄屋 菅野村庄屋 四郎吉 宮野村庄屋 喜右衛門

大山村庄屋 文右衛門 穂坂村莊屋 良右衛門

測量中、読み上げられるデータを梵天持ちが持つていてる帳票または自分が持つていてる帳面に書き込んでゆく役。

### 一、磁石臺持裁判

大庭村組頭 久 七

方位盤、半円方位盤などの台を持ち運ぶ人足の指揮者。

### 一、御繪圖持裁判

上寺村組頭 榮 助

現場に、提出した村絵図、測量下図、参考絵図などを持ち運んだ人足の指揮者と思われる。人足数人がかりで運ぶほど資料を現場に持ちだしたことのうかがわせる記述である。

### 一、杭掛屋持裁判

宮野村久助

測量杭と杭を打つ掛矢を持ち運び、杭打ち作業する人足の指揮者も用意された。

### 一、毛氈野風呂番戸類裁判

石成村組頭 彌四郎

小憩するとき、腰かけに敷く毛氈、お茶を沸かす小さなお風呂の形をした湯沸かし、ばんこ（他でも出てくるが意味を失念。縁台かな。乞う御教示）など持ち運び人足の指揮者。

### 一、御朱印御長持裁判

多々連村組頭 卵三郎

ここでは長持ちは二棹携帯していた。定数は一棹四人なので、計八人、肩代わりを付けると一六人になる。資料が増えて重かつた（規定では廿貫）ろう。増人足だったのでは。これは大仕事。

### 一、御竹輿拿裁判

下大庭村組頭 傳 吉

竹の簡単な駕籠（青駄）のことか。測量現場で少し離れた移動に

使われたらしい。傘は日傘、雨がさ。いづれも忠敬の身辺サービス要員である。

役割不明。いまさら御用旗でもない隊列である。早朝夜明け前出发となるので、高張り提灯、手提灯が必要だった。あるいは御朱印箱など忠敬私物運搬か。

### 一、福岡御役人方御聞次

田中村登平

随従する福岡藩士の指示を村方に取り次ぐ役か。

### 比良松御畫所

昼食を取った比良松での世話係り

### 一、勘解由様

宿亭主 大庄屋代勤 登久右衛門

### 一、同所詰方

長淵村莊屋 亦三郎

### 一、御下役

上寺村莊屋 藤 常次郎

### 一、町内御宿々

宿亭主 比良松村莊屋 恒右衛門

### 一、下町御宿々

諸裁判 須川村莊屋 藤 作

付廻り役人以下は分散らしい。

### 織面田御小休所

宿亭主 古毛村 古毛村 清

### 一、勘解由様

古毛村莊屋 小平三郎

### 一、同所詰方

長淵村莊屋 亦三郎

### 一、立下宿見ケメ

古毛村 嘉平

全

忠

平

立下宿見ケバは分からぬが、休所に派遣されていて、出立する  
と、いま出ましたと通報する係りではないか。お立ち見立てといわ  
れている。途中の経過地に人足を配置して通報させたところもある。

一、勘解由様	宿亭主	鳥集院村庄屋	嘉平次	古毛村組頭	茂吉	上寺村	興右衛門	大庭村組頭	卯平
一、同所詰方	宿亭主	石成村庄屋	亦七	入地村組頭	勘右衛門	長瀬村組頭	卯平	宮野村組頭	喜次
一、永井甚左衛門様	宿亭主	吉郎右衛門	清蔵	比良松組頭	吉郎右衛門	田中村組頭	恵助		
一、同所詰方	宿亭主	上寺村庄屋	常次郎	多々連村	清右衛門	下大庭村	宅平	宮野村組頭	卯平
一、原左太夫様	宿亭主	吉郎右衛門	清蔵	古毛村	善次	古毛村	吉右衛門	大庭村組頭	卯平
一、同所詰方	宿亭主	宿詰兼ル	新四郎	比良松村	吉右衛門	石成村	儀助	宮野村組頭	喜次
一、上野小八様	宿亭主	多々連村	□軒	下大庭村	宅平	下大庭村	宅平	田中村組頭	恵助
一、山本源助様	宿亭主	清右衛門	軒	古毛村組頭	古毛村組頭	古毛村組頭	古毛村組頭	長瀬村組頭	卯平
一、同所詰方	宿亭主	吉郎右衛門	清蔵	吉郎右衛門	吉郎右衛門	吉郎右衛門	吉郎右衛門	吉郎右衛門	吉郎右衛門
一、町内御宿々	諸裁判	大庭村庄屋	卯七	石成村庄屋代勤	次八	石成村	儀助	石成村	儀助
		大庭村代勤	茂三郎	多々連村	組頭中				
		菱野村組頭	久助	古毛村組頭	善次				
		古毛村組頭	善次	古毛村組頭	善次				
原、上野、山本、は付廻りの藩士らしい。その他の関係者は町内 に分宿。火番は夜廻りで、人足を連れて終夜警戒にあたつた。 一、假御郡屋詰方 比良松村庄屋 藤作 長淵村庄屋 又三郎 全村 懲太郎	役割不明。	一、火番	大庭村庄屋 卵七 石成村庄屋代勤 次八 大庭村代勤 茂三郎 多々連村 組頭中 菱野村組頭 久助 古毛村組頭 善次	一、久保鳥川越 一、中町川越 一、比良松川越 一、牛田川越	裁判 裁判 裁判 裁判	下大庭村 組頭 入地村組頭 宮野村組頭 古毛村組頭	下大庭村 組頭 入地村組頭 宮野村組頭 古毛村組頭	下大庭村 組頭 入地村組頭 宮野村組頭 古毛村組頭	下大庭村 組頭 入地村組頭 宮野村組頭 古毛村組頭

各村毎に忠敬に挨拶して、近くに位置し質疑に応じ案内する庄屋  
名。地理的なことは聞かれても分からぬので、地理巧者の名代を  
連れて出た。名代付はそんな意味だろう。

一、久保鳥川越	裁判	下大庭村 組頭
一、中町川越	裁判	入地村組頭
一、比良松川越	裁判	宮野村組頭
一、牛田川越	裁判	古毛村組頭
川越には、踏み板、船渡し、仮橋、船橋など色々あつた。川ごと に人足と責任者が決められた。		

付廻りの宿の担当者

御役人様方御着迄受持裁判

一、人馬裁判	須川村庄屋 恒右衛門 古毛村庄屋 小平
須川村組頭中	下大庭村組頭 宅平
入地村番頭 兵八	

人足、荷馬の手配。これは大変な役。

大庭 茂三郎  
石成 次八

一、御乗物  
一、御長持

裁判  
裁判  
菱野村組頭 只七

大庭村代勤 茂三郎

藤五郎

一、左太夫様御下宿三人内一人夫

嘉平

一、小八様御下宿御一人

善平

一、源助様御下宿御一人

千作

一、篠田正貞様御三人

宇吉

一、藤本圭次様御二人

清次

以上が付廻り藩士で供をつれている者は人数が増える。三人なら  
供が二人である。一人の者は供なし。夫は人足。

一、賄方上下貳人内夫一人見ケメ  
一、賄方五人

源次  
千代吉

料理人は助手を連れた板前を他から頼んだらしい。賄方はその作  
業員ではないか。

一、綱引五人 御三人

又吉

よく分からぬが、鉄鎖、間縄を引く人足は馴れないと仕事が進  
まないので、郡中を通し人足にした例がある。綱引五人はそうも考  
えられるが、御三人は分からぬ。全員三人で綱引五人では意味不  
明。逆なら話はわかるが。

一、青柳勝次様上下貳人内夫貳人

清太郎

青柳は、福岡の国学者青柳種信のことである。文化九年七月の測  
量の際に浦方の下役として伊能測量に付廻り、その学識に忠敬は深  
く感銘し、二度目の担当外の測量にも呼び出して随従をもとめた。  
青柳は、藩命を受けて付廻った。常に忠敬の周辺に従つたと思われ  
る。上下貳人内夫貳人は納得できない。

右は山田村より久喜宮村御泊り所迄  
十月二日

同じような役割が出てくるが、どう役割が違うか定かでない。

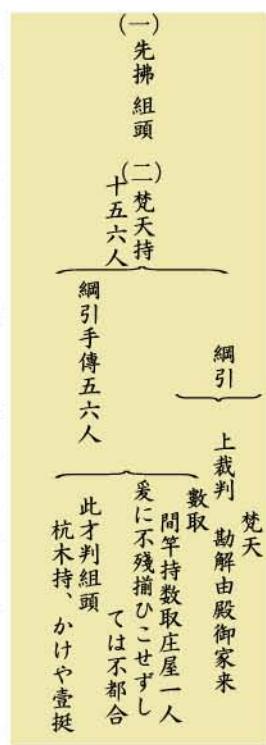
測量方山田御泊りに付宿々献立  
文化九年申十月二日

御 献立 平  
酒 飯 吸物  
鉢 汁  
押 豆腐、竹把  
物 松茸、竹巴  
ひたし  
色々

翌朝献立 平  
飯 汁  
ねり葛、鮒一切  
くずし豆腐

献立はこれまで筆者が見たなかでは質素である。御酒は肴の意味  
だと思うが、原則禁酒なので、正式にお酒をつけるのは打ち上げ会  
くらいだった。

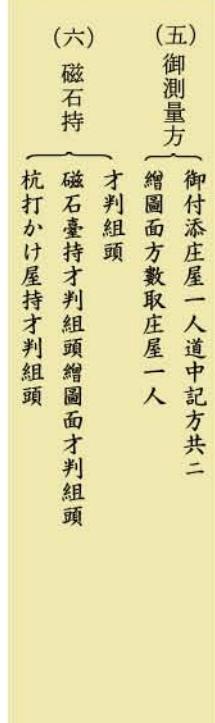
行列次第



隊列に先頭は先払い、続いて 梵天持ち十五・六人、綱引き五・六人、そして数取り庄屋が着く。そして全体を勘解由（忠敬）の家来が指図する。家来は従者のことだが、ここででは棹取り中間を指すと思われる。そのあとに組頭に指揮された、杭、掛けや壹挺が続く。



梵天部隊が出たあと、もういちど掃除が入つて忠敬一行の出番とは驚いた。その村の案内庄屋が地理に詳しい者を連れていた。青柳はこのグループだったと思われる。



忠敬の後に測量方が続くなっているが、メンバーは下役四人と内弟子四人である。付き添い庄屋、道中記方、絵図面方、数取

り庄屋がつく。道中記方は書き上げ担当かと思ったが、経過の記録係りのようだ。

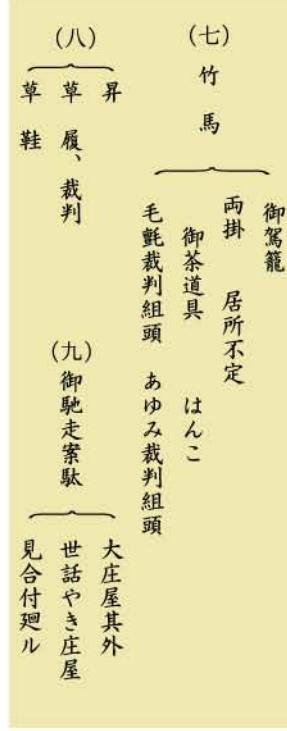
こここの隊員の役割は、本（正）羅針、添え（副）羅針と、現場の作業指揮だから、ここにまとまって歩くばかりということは考えられない。

梵天の位置決め、梵天、杭の近くで、正視、逆視で方位を測る、交会法目標を測る、間縄引き作業の指導など、間縄作業班と入り混じつて仕事がされた筈である。

しかも、原則として先手、後手の二手分けがおこなわれたから、全隊員は二組に分かれ、別手は坂部が忠敬に代わって全体指揮をとつた。

次項の磁石持ちグループは測量現場作業の道具運搬係りだ。

これらで見ると大体の並び順を示したもので、このとおり歩いたということではないと思われる。



このグループは完全なサービス部隊で、実務部隊の跡をついて歩き、用務を命じられたとき、前に進んで用を足した。

駕籠は乗用の駕籠で測量区間の作業が終わって、宿舎に直行する際に忠敬の乗用に用いられた。作業中利用する竹輿とは別なもの。両掛けは忠敬の身分を示す道具だから、本人の近くにいらないとなならない場

合もあつたろう。毛氈、お茶道具などは小憩用品、あゆみは踏み板か？  
ばんこは縁台だつたよう思うが？

昇り、草履、草鞋は人数が多いから補給係りは大仕事だ。そして支  
援隊本部の大庄屋グループが続く。駕籠は下役の分も提供された場合  
がある。また、予備駕籠は何處でも用意され、急病などあつたとき次  
の宿舎に送り届けられた。

○毎夜星測も節撰夫六七人留見ケメ等に庄屋壹兩人立廻り

但御著後晝之内星測臺に取立に相成候事

天測場には六・七人人足を出し、庄屋も見廻つた。象限儀は到着後、

昼から組み立てがおこなわれた。

○曲り目又は岩鼻に磁石居り方角見積り又遠山調子一切

曲がり角や岩鼻には方位盤を据えて方角を測り、遠山も測つた。

○右御一鼻之人數貞兵衛御測量之節右之通惣人數罷出る

但海岸船も寄かたき場所にて候へば勿論煩雜にて出方の者格別指勤不申而  
は不都合に有之候事

手分け隊にも同じような人数がでること。船が岸に寄せにくい場所  
もあるので、手伝いのものは特別に働くようにしなければならない。

○此札綱引裁判か数取庄屋か書認、梵天竹に持添させ置先に行く  
この札を綱引裁判か數取庄屋か書いて梵天持ちに持たせて先に行く。

数字は棹取りが読み上げる。

○数取庄屋跡よりはしり付右梵天に持添之札を取道中記方之前に而  
間数等札表一切よみ上る

数取庄屋は後から走り寄つて、梵天持ちが持つてある札をとり、道  
中記方の前で間数などを読み上げ記録させる。

○札は不残札繁に指置候分を御側量相済之上御指圖を請相納る  
札は残らず札繁に指しておき、測量後、指図を受けて納める。(二)

## 正正元々何百間

村境

百五拾間



藩廳よりの觸状

測量方入込前為下調子明廿九日  
上野小八山本源助左之通罷越候に

付大庄屋付添村々庄屋案内いたし

候様申出に相成候其心得各方并付

添之庄屋一同罷出御手當向致承知

候様可被取計候且又此間も達書を

以一統觸置候通案内庄屋之外にも数取庄屋等其外測量先就御用罷出

候庄屋共は村高尋之節相答候村高をも此節致承知居候様有之度候條

右類に掛候村役人等役割相極め夫々手都合可有之候以上

藩庁から下準備のため役人が向かうとの通達である。石高について

聞かれた場合、決まつてある通り答えるよう注意喚起している。

(わたなべ いちろう)



では札へのデータ記入と札データの  
収集を村役人にやらせたようである。  
忠敬自ら方位を測り、札を受け取つ  
て記帳した、という記録もある。

札繁は図のような器具だろうか。

## 忠敬と大雄山最乗寺・道了講・私見

大沼 晃

平成二十三年一月十日（成人の日）快晴、風やや強し。古希を過ぎた身に堪える早朝、わが住まいであるマンション最上階から西方を眺望すると、真白く輝く富士山や大山を見渡すことが出来た。昨晩は箱根の山に雪が降つたとかで、ラジオは箱根路のいたる所で交通止めになつていると報じていた。標高一二〇〇mほどの大山にも雪が降つたようだ、山肌はうつすらと白くなつていて。（下写真参照）この時期の大山登山は、冬用の完全装備で出かけないと、山頂は積雪や凍結でとても滑りやすく遭難の恐れがあると聞いている。

第八次測量日記によると伊能忠敬は、文化八年（一八一一）旧暦の十一月二九日大山に登つたことが分かる。新暦で言うと一月上旬ごろで、厳寒のこの季節に相当するのではないかろうか。なぜ、気象条件の悪いこの時期を選んで登頂したのか、その訳を筆者なりの推論を前号に記述（見晴らしのいい山頂から各方面の目標物を観測し、地図の精度を上げる云々）したが、鈴木事務局長よりご指摘があり、忠敬は當時一般的に使われていた「遠山目的（えんざんかりめあて）」を多用していたので山頂から観測するという推論に間違いがあることに気付かされた。【詳しくは、会報第九号 伊能忠敬の測量法を参照のこと】

方位線の入った地図は伊能図の特色であり、大山の頂に向けて十数本の赤い線が放射状に引かれており、当時は江戸市中に限らず関東周辺からでもよく見ることが出来たようだ。

今回は、前号に引き続き測量日記に基づき大山（南足柄・大雄山最乗存）→丹沢山塊から流れ下る四十八瀬川沿いに松田村（現・神奈川

さて、忠敬一行は大山山頂から四方を遠望する目的を遂げ、蓑毛道を秦野（はだの）盆地へ下り、田原村（現・神奈川県秦野市葛葉川の北岸あたり）の名主・儀衛門と百姓治郎左衛門宅に止宿。

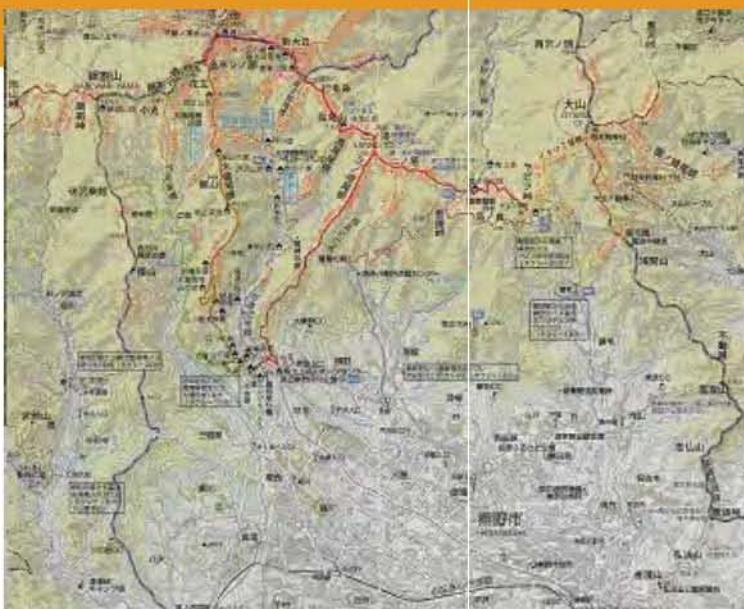
翌十二月一日 曾屋村→水無川渡河→平沢村→堀川村→渋沢村→千村→菖蒲村（ここまで現在の秦野市。町村合併後も地名として現存）→丹沢山塊から流れ下る四十八瀬川沿いに松田村（現・神奈川



寺までの道を辿りながら、忠敬の隠された意図を解明したい。その理由の一つに矢倉沢道を足柄峠に向けて直進せず、関本村の最乗寺道追分から道をそれで、最乗寺まで丹念に測量し絵図に残していること。次に、先手組を足柄上郡和田原村追分から東海道の小田原宿まで出向かせ、わざわざ測量をさせていること。その理由を忠敬は日記に記述していないので、筆者なりの解釈をご披露したい。【注・筆者注釈挿入文】

さて、忠敬一行は大山山頂から四方を遠望する目的を遂げ、蓑毛道を秦野（はだの）盆地へ下り、田原村（現・神奈川県秦野市葛葉川の北岸あたり）の名主・儀衛門と百姓治郎左衛門宅に止宿。

翌十二月一日 曾屋村→水無川渡河→平沢村→堀川村→渋沢村→千村→菖蒲村（ここまで現在の秦野市。町村合併後も地名として現存）→丹沢山塊から流れ下る四十八瀬川沿いに松田村（現・神奈川



県足柄上郡）に出る。  
（上地図参照）

【秦野は、神奈川県  
中央部の西側に位置し、  
北は丹沢山塊、南は渋

沢丘陵に挟まれている  
盆地。秦野市史による

と家康江戸入府時代の  
相模国は、西部の小田  
原藩を除きほとんどが  
天領（直轄地）で、時  
代の変遷と共に旗本知  
行地として細分化され  
ていったとのこと。測  
量日記にも何村は何某  
の知行地と裏付けるよ  
うな記述が見える。

盆地であるが故に畑  
作が主であったようだ。その中でも烟草栽培（明治時代に特產品とし  
て隆盛を極める）が盛んであった。丹沢から流れる水や伏流水の恵み



があり、良質の水には困らなかつたようだ。

村々を結ぶ道は、蓑毛道・富士道と呼称され、大山講や富士講・道了講の人たちが利用していた。伊豆国や三河国から小田原宿を経て、矢倉沢道→蓑毛道を利用する人たちで賑わつた。

秦野盆地の農民たちは、この道を利用し小田原方面へ農作物を運んでいたのではないだろうか。また、最大消費地である江戸に向けて物資を馬の背に乗せて、伊勢原から大山道・田村道に入り、田村の渡しまで運び相模川を荷船で河口まで下り、浦賀湊→神奈川湊→品川湊へのルートもあつたのではないだろうか。単に呼称される信仰の道ではなく、当時は人・物・カネ・情報が頻繁に行き交う地域にとつて重要な道であつたような気がする。】

川音川渡河、足柄上郡に入る。松田村以降は小田原領→神山（こうやま）→松田惣領→吉田島村→牛島村→宮ノ台村→竹松村→和田河原村→弘西寺村→関本村間まで測る。止宿加藤滝右衛門、一同一宿。

【現在の松田町は、足柄地域にある中心的な町で、酒匂川、川音川、中津川とそれらの支流河川地域が町を形度つていて。土地は、南傾斜地で水はけが良く温暖。茶やみかんが特産。松田惣領、松田庶子、神山、寄（やどりき）の四地域が明治二十二年合併し松田町になつた。

松田惣領の「惣領」は「総領」と同意語であり、何故に地名の下に付いているのか不審に思い、松田町史を調べてみると意外な由来があつた。古文書に『松田有常松田郷に住みて領主なり。有常二子あり、太郎某は弟なれ共妻の出なるにより太郎として本家を継がせた。次郎某は妾腹なる故に兄なれ共庶子として分家する。是惣領庶子に村の名の由りて起る所以なり。是以前は一邑にして松田と称えしこと論なし』とある。一時、惣領地区を上松田、庶子地区を下松田と呼んだこともあつたが、元の惣領と庶子に戻つてゐる。これを読み、地名の由

来が明確になり納得できた。

その次に、松田有常とはいかなる人物なのか調べを進めると、意外や以外、藤原鎌足を遠祖とする藤原秀郷（通称・俵藤太、藤原北家・房前から五代目の人）の流れを汲む後裔（関東一円に一族が散らばる）相模国波多野氏（秦野氏）の氏族で、鎌倉期に残存した波多野氏一族をたばねる惣領家で、松田氏の始祖となつた人であることがわかつた。

松田氏は、小田原後北条氏（小田原役の折、家老職）に第一の家來として仕え、主家滅亡後、加賀前田家に四千石で召抱えられた。その分家には、徳川家の旗本になつた家系もあるそうだ。小生の推測ではあるが、松田家は歴史の有る名門の出であるので、取り潰しにあわず本領安堵されたのではないだろうか。知識人である忠敬のことであるから、一連のことは知つていたような気がする。知らぬは意外と歴史教育の害に犯され、情報過多の現在人だけかもしれない。】

二日 晴天。先手（坂部一行）は、和田河原村追分より小田原に向けて測量。駒形新宿→塚原村→沼田村→足柄下郡北ノ久保村→府川村→穴部村→多古村→井細田村→池上村→荻窪村→小田原市中（広小路、須藤町、大工町、台宿、一町町田、青物町、高梨町）→東海道まで測る。止宿本陣清水彦十郎。

【筆者は昨年の秋、神奈川県立歴史博物館の常設展示「近世」コナーへ出向き、江戸時代の宿場と関所および旅道具類の展示を見学した。展示物の説明パネルを読み進んで行くと「矢倉澤道見取繪図」という文字が目に飛び込んできた。一瞬ひらめいたので学芸員を呼んで尋ねたところ、やはり「五街道分間延絵図」（寛政年間道中奉行から命じられ、文化三年に幕府に献上されたもの）の一環で作成された脇街道の絵図のひとつであることが分かつた。県歴博ではなく県立美

術館にあるとのことで出向き閲覧すると、何と絵図の出発地点は小田原からで、御殿場に至るまでの見取絵図あつた。絵図を見るまでは矢倉沢往還＝江戸から矢倉沢関所までという既成概念を持っていたので、何故なんだという驚きを禁じ得なかつた。（上図参照）

『（前略）矢倉沢道は、駿河と甲斐や相模西部を結ぶ物資の輸送路として、また富士道の通路として、或いは甲州方面から東海道の三島や沼津、または箱根に赴く人たちの重要な交通路になつてゐたのである。（後略）』



そのような背景もあり、忠敬は幕府の意向を強く受け、小田原―関本→御殿場間の詳細測量に着手したような気がする。そのようなことで一つ目の疑問点が解消できたのである。】

一方後手（忠敬一行）は、関本村最乗寺追分碑より飯沢村を経て最乗寺まで測る。その後、関本村まで引き返し止宿前より測量開始。福泉村→雨坪村→弘西寺村→刈野岩村→刈野一色村→矢倉沢村まで測る。矢倉沢関所役人の柴山軍兵衛、安藤儀右衛門の出迎えを受ける。止宿

【忠敬が矢倉沢道をそれで測量をした最乗寺の概要は、箱根外輪山の明神ヶ岳（一一六九m）の北東側山麓に位置し、正式名称は大雄山最乗寺。応永元年（一三九四年）に了庵慧明が開山。永平寺（福井県）や總持寺（横浜市）が大本山で、それらに次ぐ格式のある曹洞宗のお寺。門葉あわせて四千余の末寺をもつ大寺。ご本尊は釈迦牟尼仏。日夜鎮護國家を祈り、真人育成の道場として精進を続いている六〇〇来年の巨刹。二十七万平方メートルにもおよぶ広大な寺域には樹齢五〇〇年以上の老杉（県天然記念物）が茂っており、山々に靈気が満ち溢れる靈場で堂塔は三〇余棟に及ぶ。地域の人たちには、別な呼び名として「道了さんまたは道了尊」と親しみを込めて呼んでいる。忠敬の中図にも「最乗寺・道了権現」と併記されている。

「新相模國風土記稿」には、「道了は旧了庵の徒弟たり、寺伝に拠り無双の大力にして、当山を開く時、師に力を合わせ、一人にて大木大石を除き、其功少からず、又師の為に、当山守護の請願を八発起し応永十八年、遂に天狗になりて、山中に往せり、（略）」と書かれている。（右下絵図は矢倉沢道見取絵図の最乗寺部分）

また、最乗寺の案内のしおりには、「（前略）応永十八年三月二七日御歳七五歳で遷化。その時のお姿が威烈、嚴かとして火焰を背負い右手に利剣を、左手に網をにぎり、しかも白狐の背におたちになつたもので衆人悉く恐惶合掌するうちに天地鳴動してかきけす如く全身をかくされた」とある。多分当時の人々は、妙覺道了を茶毬に付し昇天して行く様を「火焰を背負い・・・天地鳴動云々」と表現し、また、超人的な働きを畏怖して「天狗」の姿に昇華させ、道了尊とあがめたのではないだろうか。そのいわれが江戸のいなせな男（火消し、大工・鳶職人、鍛冶職人など）たちの道了尊信仰の淵源になつたような気がする。

好奇心旺盛で名所などにこまめに立ち寄つてゐる忠敬は、このような靈地をぜひ訪れたいみたいという気持を持つており、また、ひょっとしたら「矢倉沢道見取絵図」を閲覧して、自分の絵図にも残したいという考えがあつたのではないか。このような観点から一番目の疑問も何となく解消できた次第である。】

（おおぬま　あきら）



## 研究レポート『伊能忠敬』（十二）

### 忠敬の見た風景（その六）

石谷 春香

人が殺傷された事件です。

「かながわの古道五〇選」に選ばれています。

進みます。

高速道路の下のさみしいところを通ります。

鶴見川にかかる鶴見大橋を渡ります。

また橋を渡ります。JR鶴見線があります。

倉庫が結構あります。

さみしい公園の横をとおります。

トランクがじやまで行けないです。

トランクがじやまで行けない！

なにもないとこです。

倉庫です。

川崎市川崎区

トランクとかが多く走っています。

マルイとそこのところを通っていきます。

みなとみらい大橋を渡ります。

JR南武線浜川崎駅があります。

公園みたいなところの横を走つて行きます。

キリン横浜ビアビレッジでちょっと休けいです。

生麦事件の碑があります。

一八六二年（文久二年）薩摩藩の大名列を横切らうとした英國

24 23

22

横浜市西区  
横浜市神奈川区

みなとみらいに行きます

マルイとそこのところを通つていきます。

みなとみらい大橋を渡ります。

進みます。

横浜市鶴見区

キリン横浜ビアビレッジでちょっと休けいです。

生麦事件の碑があります。

一八六二年（文久二年）薩摩藩の大名列を横切らうとした英國

25

川崎市川崎区

トランクとかが多く走つています。

なんだかきたないところです。

だれもいないところを行きます。

JR南武線浜川崎駅があります。

公園みたいなところの横を走つて行きます。

ホームレスがいっぱい住んでいるところです。

早く行きます。

なんだか怖いところです。

右に曲がります。



まっすぐ行きます。

右に曲がろうと思つたのですが、信号がありません。

トラックばかり走つてきます。

ずっと先に信号が見えます。

しかし、しばらく待つたら車がいなくなつたので道路を渡ります。

セメントの工場があります。

神奈川臨海鉄道のふみきりを渡ります。

大きな工場があります。

このあたり京浜臨海部（京浜工業地帯）は「かながわ未来遺産

「〇〇」に選ばれています。

またふみきりを渡ります。

電車は走つているのでしょうか。

大きな工場が増えています。

ふみ切りです。

右にまがります。

高速道路の下を行きます。

工場ばっかりです。

まっすぐ。

浮島橋を渡ります。

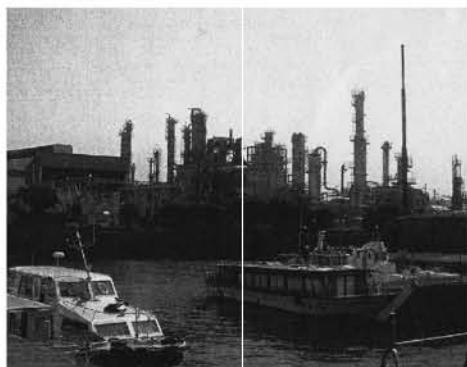
川崎浮島町は「かながわのまちなみ「〇〇選」」に選ばれています。

道がまっすぐで先が見えません。

線路の横を行きます。

まっすぐ！まっすぐ！

飛行機が飛んでいます。



暑い！休けい！

ガソリンスタンドの自動販売機で水をのみます。

ガソリンスタンドの上に「かながわ最後のガソリンスタンド!!」と書かれています。

まっすぐ！

そして！

道が行き止まりになりました。

ここが神奈川県の一番のはじっこです。

着きました。

湯河原の千歳橋とここが神奈川県のはじっこです。

とうとう着きました。

となりに浮島町公園があります。



東京湾アクアラインの建物が見えます。

羽田空港も見えます。

飛行機が見えます。

飛んでくる飛行機は大きく見えます。

かもめもどんでいます。

だれもいません。

この公園に来る人はつりの人ぐらいと思い

ます。

しばらく休みます。

とても静かなところです。





26

未来遺産「○○」 「かながわのまちなみ」 「かながわの建築物」 「○○選」 に選ばれています。  
京急大師線川崎大師駅の前を通ります。

大師通は「かながわの古道」 「五〇選」 に選ばれています。

はしります。

小杉の標識があります。

旧東海道の碑があります。ここ

は富岡八幡宮から歩いてきたとき通った所です。

まつすぐに行きます。

京急本線の下を通ります。

川崎市幸区になります。

川崎市幸区になります。

JRの下を通ります。

振り返るとJRの鉄橋が見えます。  
多摩川の横を通ります。

まっすぐ進んで左に曲がります。  
JR南武線鹿島田駅のところを通ります。



・・・

さて今度は家を目指します。

もと来た道をもどります。

まっすぐまっすぐ：

少し行くと商店街になります。

川崎大師です。川崎大師は「かながわの

未来遺産」「かながわのまちなみ」「かながわの建築物」「○○選」に選ばれています。

京急大師線川崎大師駅の前を通ります。

ときどき行くバーミヤンがあります。  
右に曲がります。

川崎市中原区

いよいよ川崎市中原区です。

本月四の交差点です。ここは歩測の実験をしたところです。

東急東横線の下を通ります。

もうすぐです！

そして私の家が見えてきました！

目的地！！

とうとう到着です！

暑いです！

メーターを見ると二一四・二八kmに

なっています。

とうとう走りきました。

長い長い道でした。

しかし全部走りました。

私の家に新しい自転車の仲間入りです。  
私の家がスタート地点で、そして最後の目的です。

行きは二時間、帰りは六日間です。  
よく走ったと思います。



次にJR横須賀線新川崎駅のところを通ります。  
佐原とか行くときはここから行きました。

鹿島田跨線橋を通りました。

## 著者からのメッセージ

「私は今、受験でとても忙しい毎日です。伊能忠敬をやっていた時がとても昔のように思えて、懐かしいです。神奈川県の海岸線を走った時も暑かったです。今年はもっと暑いですね。長い間、私の研究レポートを載せていただき本当にありがとうございました。」



(いしや はるか)



29

湯河原から家までの地図です。  
伊能忠敬のまねはぜつたいできません。

最後に結論！

二一四・八一kmは東京から日本海まで行つてしまします。  
私の家からだとバスケ部の夏合宿のあつた新潟県魚沼市まで行つてしまします。  
まだまだ走れますがもういいです…



広い地図で見るとなんだか近いように見えますが、一万分の一の地図でずっと見るとやつぱり遠いです。  
地図には道はでていますが、上り坂、暑さ、車のことはでていません。

—完—





御用

## 伊能忠敬史跡紹介

### 伊能忠敬小倉顕彰碑

### 松山「史跡 伊能忠敬休息之地」

伊能 洋

#### 伊能忠敬が谷村を訪れる

記念献花式が、六月四日、常盤橋際の記念碑前で挙行されました。伊能測量隊に扮した顕彰会員一行が常盤橋を渡つて会場に到着する

と、小倉顕彰会会长で、本会会員 稲吉（あきよし）正明氏の式辞ではじまり、出席した北橋健治市長の祝辞と渡辺名譽代表の祝辞があり、伊能家七代目伊能洋さんのメツセージ

が披露されました。ついで、参加者全員がひとりづつ献花。そして、十年前に小中学生、一般人が埋納したメツセージが取り出され、会場を井筒屋ホールに移して、星埜代表理事の講演と、メツセージの披露がおこなわれました。当時の小学生数十人が登壇、すばらしい成長に目を見張りました。

(W)

伊能忠敬小倉顕彰会 御中

本日は小倉・伊能忠敬記念碑建立十周年記念祝典の開催、心よりお慶び申し上げます。思い起せば十年前の建立記念式には妻陽子とともにお招き頂き、お見送りいたしました。この長い年月、毎年一献花の集いを催され、忠敬の事跡の顕彰、記念碑の保持という運動を続けてきました。皆様のお力添えに深い敬意と感謝を申し上げます。何よりも本人が残念がつておりましょ。今後ともこの催しが盛大に続いて行かれますよ。心から願い、関係者の皆様のご挨拶を切に祈ります。

風薫る一昔経し忠敬碑

二〇一一年六月四日

伊能 洋



文直  
権司 博幸

平成二〇年六月、愛媛県松山市谷町の一角にあつた木製の標柱「史跡伊能忠敬休息之地」が、松山市潮見公民館・同谷町町内会により、同じ表示の石造記念碑として新されました。松山の石川明重さんから、この貴重な報告をいただきましたのは、実は昨年の二月のことでした。たまたま妻陽子の急逝から間もない時で、当時の私は毎日毎日を生きることで精一杯であり、石川さんは受取りも差し上げず大変な失礼を致しました。遅ればせながら、忠敬研究62号に記録させて頂いて、お詫びを申し上げたいと思っています。

御海容いただければ幸いです。なお、松山は陽子が大好きだった土地の一つで、昨年の正月も「今年、もう一度行きましょう」と楽しみにしていました。彼女がまだ居りましたら、まつ先にこの記念碑に駆け付けたに違いありません。

忠敬の事跡は、忠敬親子、下役内弟子、若者、小者の宿舎を用意し、夜は食事や草履なども用意し、夜は寝るの番がつき、医師も宿泊させていた。西条藩は忠敬親子、下役内弟子、若者、小者の宿舎を用意し、夜は食事や草履なども用意し、夜は寝るの番がつき、医師も宿泊させていた。

このように各藩の幕府の命を受けて測量する忠敬に対して最大の協力と最高の接待で迎えたという記録が残っている。その旨、音原道貞公が谷村の大森山でそれをして休息されたことから後世の人たちが天満宮を建てて崇拝するようになつたが、この度の伊能忠敬の谷村への訪れの史実は、音原道貞公にうべきものである。

記念碑の説明板



## 会員便り

山本 公之（小平市）三千葉工大の巡回フロア展に行きました。雨の中御用の旗が見え、案内されている学生さんが御苦労様でした。また、「忠敬大分を測る」にも昨秋出掛けました。日帰りに近い日程だったので、心残りです。これからも各地へ参りますと存じます。

河西 浩（甲府市）十五周年研究会が無事盛会に終えられ良かったですね。佐原の宿に一泊してと思いきや大雪で足をうばわれ、さらに原発事故で彼の地にはいつ行けるか課題も多いです。今春より教育出版の国語で忠敬さんが伝記で取り上げられています。従来にない大変詳しい読物になっていますので、一度六年生の教科書をお孫さんと御一読ください。

川上 清（水戸市）一〇年前の伊能ウォーカの再現をさらに発展させた「健やか爽やかウォーカ日本1800 歩いてニッポンを元気に」茨城県四十四市町村完歩者が今年中に出そうです。成家 淑子（香取市）伊能家旧宅の復興・佐原の街並みの復興が早く進められたいと願っています。秋間 実（逗子市）大震災のことで重い気分をかかえてすこしてしています。しかし、読み書きはなんとか続けています。



### 新会員紹介

石川県支部 河崎倫代

昨年十月、金沢工業大学で開催された「完全復元伊能図全国巡回フロア展」へ来てくれた相良文昭さんと江波浩行さんが、伊能忠敬研究会に入会の意志を示し、相良さんは正式に入会しました。江波さんはしばらくは石川県支部の準会員として関わることであります。これからも、小・中・高の教科書に登場し続けるであろう「伊能忠敬」が、石川県内に

三十七泊も滞在し測量を行つたこと、沿岸の村々から大勢の手伝い人足が出て測量作業を支えたことなど、もっと多くの県民に知つてもらいたい。そんな思いが、若い二人の参加で実現できそうです。全国の会員の皆さん、どうぞよろしくお願ひ致します。

### ★相良文昭さん

はじめまして、相良文昭と申します。平成二十二年十月に金沢で開催された復元伊能図の展示会に伺つたことをきっかけに、平成二十三年三月の羽咋市の探訪に同行致しました。伊能忠敬の一行が、測量の際に、邑知湯を確認した時の山裾と思われる場所に行くことから始まり、その場所で邑知湯が実際に確認できるか眺望しましたが、建物と天候の悪さのせいで確認にくかつたです。ただ、当時の建物は現在より低いだろうし、また当時の人々の方が視力もよかつたから、その当時は十分に邑知湯を確認できたのではないかという感想を持ちました。次に、旧道などを巡つて伊能図に書かれている地名の箇所を巡り、真館家へ行きましたが、このような経験がありませんでしたので刺激になりました。

二〇一〇年冬、初めて石川県支部のミーティングに参加しました。私はITによる活動支援を提案しました。この時、忠敬と石川県の接点を教えていただきました。二〇一一年冬、初めて石川県支部として「伊能忠敬測量隊、羽咋を測る」を催し、参加させていただきました。文献の考察、フィールドワークによる調査など、体験しました。その昔、忠敬が歩いた道を今、自分達が辿る。九十九里浜に生な道を教えてくれるようで、ちょっととしたタイムマシン感覚があり面白いと感じます。また、測量隊に出された献立も、興味深いたいと思います。各地域の風土が表れていて、當時の日本の食文化や四季折々の旬や環境などを辿る上で最も貴重な記録だと考えます。忠敬は実にたくさんの顔があり魅力的です。

今後は、伊能図に書かれている石川県の他の地名の箇所や、その周辺にある寺社・遺跡などを巡つてみたいと思つておられます。その後も触れたらと思つておられます。

### ★江波浩行さん

二〇一〇年十月、金沢工業大学で開かれた、完全復元伊能図全国巡回フロア展に立ち寄りました。会場はたくさんのお年寄り男女。そして、河西先生がおられました。私の日本史の先生であります。再会のご挨拶をしたところ、伊能忠敬研究会石川県支部として参加されるとお聞きしました。その時、初めて研究会の存在を知りました。私としては、小学生の頃、卒業制作に伊能忠敬を取り上げたことがあり、何かでできることがあれば参加してみた旨をお伝えしました。その後、伊能忠敬研究会石川県支部として「伊能忠敬測量隊、羽咋を測る」を催し、参加させていただきました。この時、忠敬と石川県の接点を教えていただきました。二〇一一年冬、初めて石川県支部として「伊能忠敬測量隊、羽咋を測る」を催し、参加させていただきました。文献の考察、フィールドワークによる調査など、体験しました。その昔、忠敬が歩いた道を今、自分達が辿る。九十九里浜に生な道を教えてくれるようで、ちょっととしたタイムマシン感覚があり面白いと感じます。また、測量隊に出された献立も、興味深いたいと思います。各地域の風土が表れていて、忠敬は実にたくさんの顔があり魅力的です。



全国巡回フロア展会場の相良君(右)と江波君(左)

# 国宝指定記念 伊能測量基本史料の初公開!

## 伊能忠敬測量日記 原文



「伊能忠敬測量日記」清書本28冊の原文(見開き約1,500面、3,000頁分)を、データ化



2011年9月1日  
伊能忠敬と伊能図の大事典つくる会  
渡辺一郎(伊能忠敬研究会名譽代表)  
V20,000(税込)  
〒269-1318 千葉県山武市寺崎58 戸村茂昭  
E-mail: info@inopedia.jp



伊能忠敬と伊能図の大事典  
<http://www.inopedia.jp>

## 伊能忠敬日記(原文)のDVD発売!

### 伊能忠敬研究会会員に特価提供!

渡辺  
一郎

ここに述べるような趣旨で伊能忠敬測量日記原文のDVDを発売します。については、伊能忠敬研究会会員に限り10,000円の特価で提供したいと考えます。御希望の方は渡辺までお申し込みください。  
入金次第、発送担当からお送りします。(振込先  
三義東京UFJ銀行 春日町支店(店番062)名  
義人 渡辺一郎 普通 046853 ただし 期間は二〇  
一年一二月末まで。お一人一点に限らせていただ  
きます)

いまから約二〇〇年前、五五歳の伊能忠敬は、深川の富岡八幡宮から日本全国測量の旅に出発しましたが、第一次の蝦夷地測量から第九次の伊豆七島・江戸近郊測量まで、六六二日の旅の経過を、毎日克明に日記に記しました。

測量日記には測量しながら現場で書いた伊能忠敬先生日記五一冊と、のちに清書した伊能忠敬測量日記一八冊の二種類の日記が香取市の伊能忠敬記念館

じめることにより、先人伊能忠敬の息吹きを直かに感じほしいと思います。

DVDの中身をご紹介しましょう。最初の画面で右側のボタンをクリックすると解説、目次、測量図、年譜、クレジットなどにジャンプすることが出来ます。まず目次をクリックします。ついで、測量回数または測量日記巻数を選びますと詳細な索引頁が開きます。

索引頁では、旧暦と陽暦による年月日、宿泊地名がでてきますので、この中から閲覧したい地域の巻数・頁をクリックしてください。日記の画面が登場します。日記画面では、貢送り、印刷などをボタンの操作でおこなうことが出来ます。参考資料として測量ルート図と伊能忠敬連のかなり詳しい年譜を添付しました。御参考にしてください。

info@inopedia.jp

\*このDVDに収録されているデータは、著作権法により保護されており、無断で転載・複写することはできません。  
御注意:このDVDはパソコン(ウインドウズに限る)で見るものです。デジタルTVではなくPCで見る場合は出来ません。不明な点は事務局にお問い合わせください。

に伝えられています。ついで二〇一〇年六月に国宝に指定されました。このDVDは清書本測量日記二八冊、約三〇〇〇頁をそのままDVD化したものであります。あまりに膨大なため、これまで刊行が難しかったのですが、ITの進歩でデジタル化が可能になりました。伊能忠敬研究会発足にあたり、渡辺一郎が引き継がれましたが、ITの進歩と、伊能忠敬認められたもので、特に清書本は、後世への報告書として残すために、色々制作されたものと考えられます。

古文書としては、分かりやすく、丁寧に記されています。本書を読み進めることにより、先人伊能忠敬の息吹きを直かに感じほしいと思います。最初の画面で右側のボタンをクリックすると解説、目次、測量図、年譜、クレジットなどにジャンプすることが出来ます。まず目次をクリックします。ついで、測量回数または測量日記巻数を選びますと詳細な索引頁が開きます。

索引頁では、旧暦と陽暦による年月日、宿泊地名がでてきますので、この中から閲覧したい地域の巻数・頁をクリックしてください。日記の画面が登場します。日記画面では、貢送り、印刷などをボタンの操作でおこなうことが出来ます。参考資料として測量ルート図と伊能忠敬連のかなり詳しい年譜を添付しました。御参考にしてください。

このDVDの特徴は、①伊能忠敬測量日記そのままでのデジタル本として初めての刊行ということです。②測量日程一覧表から容易に読みたい部分が検索できることです。膨大な日記から必要な部分を検索することは大仕事でしたが、本DVDでは探す場所が分かれれば簡単に索引できます。また、③すべてDVD一枚に入っていますから、場所をとらないで、伊能忠敬の日記二八冊を座右に備えることができるのもメリットの一つと考えます。

クレジット

企画・製作者	編著	渡辺一郎(伊能忠敬研究会名譽代表)
ディレクタ	刊行	二〇一一年九月一日
画像処理		
デザイン		
発行者		
伊能忠敬と伊能図の大事典イノペディアをつくる会(会長 渡辺一郎)		
事務局所在地		
千葉県山武市寺崎五四八 戸村茂昭方		
〒269-1318		

## 伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行つております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年四回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一万円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバツクナンバーをお送りします。

### 四、事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール inouken@ae.auone-net.jp

郵便振替口座 〇〇一五〇-六一〇七一八六一〇

### 投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。  
一回の掲載は原則として刷上り6頁迄（刷上り一頁は四〇〇字  
原稿用紙で約四枚）です。提出原稿は返却しません。採否は編集部にご一任下さい。

原稿は原則としてCDやメール添付など電子媒体でお送り下さい。手書き原稿の場合はご相談下さい。  
テキスト（本文）はマイクロソフト・ワードなどの標準的なソフトのフォーマットを用いてファイル化してください。  
カラー版のメリットを生かした写真・図版を歓迎します。ファイルはJPGまたはフォトショップのPSD形式で、印刷サイズで三五〇ppi程度の解像度のものを用意下さい。プリントアウトした鮮明な写真・図版でも受け付けます。

話題、情報、近況などの原稿・お便りをお待ちしています。

### 編集後記

◇研究会に入会して一年少々の私が、会誌の編集を担当することになり、とまどいを禁じ得ません。経験豊かな諸先輩方にアドバイスをいただきながら、会員の皆様の研究や活動をしつかりと記録し、研究会の発展に微力ながらお役に立てれば、と思つておりますのでよろしくお願ひいたします。◇さて、すでにお気づきのように本誌はこの号からカラーバー化しました。カラフルな伊能図や多様な史資料を詳細に紹介したり、関連する地図や地點の写真をと記述したりで掲載することによって、そこから得られる情報は格段によつて、皆さんからいただいた電子原稿をコンピュータとにカラーレーザーで掲載することによって、そこから得られる情報は格段によつて、皆さんからいただいた電子原稿をコンピュータと同時にこのをしながら編集し、それを印刷屋さんに送れば数日の内に雑誌が手元に届く仕組みになっています。◇安価で自由度があるために、投稿者も編集者もそれなりの手間と頭の切り替えが必要なようです。◇しばらくは従来の編集スタイルを引き継ぎながら、カラー化、電子化のメリットを最大限に生かせるような、新しいデザインの本誌に変えていくことを模索していきたいと思います。◇会員の皆様からも、カラーに映えるすばらしい写真や、本誌についての忌憚のないご意見をお寄せ下さい。（T）原い新が必るにらに

- 「伊能研究会」公式ホームページ <http://inoh-tadaka.org/>（休止中）
- 「InoPedia（イノペディア）」：伊能忠敬と伊能図の大事典 <http://www.inopedia.jp/>
- 「伊能忠敬図書館」：忠敬関係の文献、画像資料 <http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>
- 「伊能忠敬研究会・資料室」：現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料 <http://www.tt.rim.or.jp/~koko/>